下水管埋設事業に伴う

# 古浦砂丘遺跡立会調査報告書

１９９３年３月

**島根県　鹿島町教育委員会**

下水管埋設事業に伴う

# 古浦砂丘遺跡立会調査報告書

目　　次

例言
1 ……Ⅰ．調査の経緯
2 ……Ⅱ．位置と歴史的環境
4 ……Ⅲ．調査の概要
4 ……1．各管路の状況
17 ……2．管路187の状況
18 ……3．24m区出土遺物
24 ……4．管路122出土遺物
25 ……付　昭和60年度古浦砂丘遺跡試掘調査
28 ……付2　出土貝類一覧
30 ……Ⅳ．小結
32 ……遺物観察表

# 例　　言

1．本書は、鹿島町教育委員会が平成４年度に下水管敷設事業に伴い、実施した古浦砂丘遺跡周辺での立会調査の記録である。

2．調査の原因となった下水管の敷設事業は、正式には鹿島町特定環境保全公共下水道事業という。

3．調査は平成４年８月４日から平成５年１月11日までをかけて実施した。調査体制は以下のとおりである。

| | | |
|---|---|---|
| 事　務　局 | 曽田　　稔 | （鹿島町教育委員会教育次長） |
| | 青山俊太郎 | （　　同　　社会教育係長） |
| 調 査 指 導 | 藤田　　等 | （静岡大学人文学部教授） |
| | 山本　　清 | （島根大学名誉教授） |
| | 石井　　悠 | （鹿島中学校教諭） |
| 調　査　員 | 赤澤　秀則 | （鹿島町教育委員会主任主事） |
| | 山本　幸二 | （　　同　　主事） |
| | 水口　晶郎 | （　　同　　臨時職員　平成4年10月～平成5年3月） |
| 調査補助員 | 岡　　泰道、小川清志 | |
| 遺物整理員 | 朝山　千穂 | （鹿島町立歴史民俗資料館）、丹羽野輝子、瀬田明子 |

4．現地での調査にあたっては、鹿島町上下水道課および株式会社佐藤組、有限会社真幸土木、有限会社小谷土木、有限会社平塚組の協力をいただいた。この場を借りて厚くお礼申し上げます。

5．報告書作成にあたっては、京都大学大学院人間・環境学研究科学生の内山純蔵さんに鯨骨の同定を、出土貝類の同定および一覧表作成を島根大学汽水域研究センター高安克己教授にそれぞれ行っていただいた。この場を借りて厚くお礼申し上げます。

6．昭和60年度に行った古浦砂丘遺跡の一部用地買収に先立つ試掘調査の記録を併載した。本文および図中では1985年試掘、’85試掘と略して表示した場合がある。

7．出土遺物は、鹿島町立歴史民俗資料館（大字名分1355-４）で保管している。

# Ⅰ．調査の経緯

古浦砂丘遺跡は、弥生時代に中心をもつ埋葬遺跡として、山本　清氏、小片　保[1]氏によって調査の先鞭がつけられ、金関丈夫[2]氏らにより、昭和30年代を中心に発掘調査が行われた。その結果、弥生時代前期から中期にかけての埋葬遺跡であることが判明している。また、その埋葬の上部にも古墳時代から古代の生活面が包含層として厚く堆積していることも報告されている。これらの複数面の包含層は、弥生時代の埋葬面を除いて、いわゆるクロスナ層で、遺物を多く含み、非常に固く締まった地層となっている。以前は、砂丘上に民家を建てる際、このクロスナ層まで白砂層を取り除き、露出させたこの層に建物の基礎を据えることもあったという。戦後、この砂丘上には住宅が立ち並ぶようになり、かなり景観も変化してきている。

古浦砂丘遺跡周辺で、近年来の町内の生活基盤整備に伴い、下水管を敷設する事業が計画された。

事業に際して、鹿島町教育委員会では、遺跡が昭和30年代の調査地の周辺にさらに広がっている可能性が高いこと、調査地は墳墓であり、住居などは別の地点に形成されていたと予想され、さらに遺跡は広がっていることが考慮されることなどから、遺跡の取扱いについて、鹿島町上下水道課と協議を行い、大字古浦地内での下水管敷設には基本的に立会いを行うこととした。ただ、平成３年度中にすでに実施されていた部分については、立会いを行うことができなかった管路があった。とくに管路122では、工事に伴う排土に多くの遺物を含み、遺跡の中を掘削したものと考えられ、遺物を採集した。

調査は、平成４年８月４日から翌５年１月11日まで、下水管の埋設に立会いを行った。立会いは下水管敷設の業者の舗装路面切断や掘削に立会い、遺構、遺物の出土を認めれば、発掘調査に切り替えるという方法で行った。遺構、遺物が認められない場合でも、掘削途中や掘削が終了した時点で壁面の清掃を行い、土層図を作成した。結果、かなりの土層図を作成したが、ほとんどが中・近世に堆積した新砂丘内で収まるもので遺構、遺物を含まず、いわゆるクロスナ層に届く管路は少なかったため、本書では、その一部を掲載するにとどめている。

また、先年遺跡の町有地化に先立って行った試掘調査結果を併載し、遺跡理解の一助とすることとした。

これらの知見からは、現在の砂丘はかなりの部分が厚い新砂丘に覆われていること、これまで知られていた地点とは別の場所でも包含層を確認するなど、遺跡そのものの立地する弥生時代や古墳時代時点での砂丘の存在や、砂丘の形成、ひいては環境の変遷を考える上でも貴重な成果を挙げることができた。

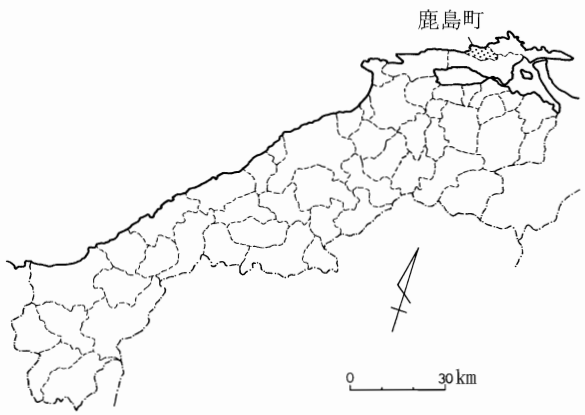



**図１　鹿島町位置図**

## Ⅱ．位置と歴史的環境

古浦砂丘は、海岸の少ない島根半島部にあって、数少ない砂浜を形成している。西に面した南北に伸びる長い浜は、漁業のほか、近世には製塩が盛んに行われたが、1785年に佐陀川が開削され、宍道湖からの真水が流れ出すようになるとすたれたが、かわりに佐陀川を利用する船便が発達し、漁獲物を松江城下に盛んに運んだ。

戦後、佐陀川沿いの砂丘で採砂がさかんに行われるようになり、古浦天満宮宮司宮永　歴（ゆたか）氏により採集されていた土器が、当時の佐太神社宮司朝山　晧（あきら）氏から島根師範学校教授であった山本　清氏に伝えられ、1948（昭和23）年の古浦砂丘遺跡の発見につながった[3]。この際、山本氏によって埋葬人骨が１体発掘されている。その後、この海岸砂丘にある古浦砂丘遺跡は、1956（昭和31）年の鳥取大学医学部解剖学教室の小片　保氏、1961（昭和36）年～1964（昭和39）年まで４次にわたって鳥取大学医学部金関丈夫氏による発掘調査が行われ、弥生時代前期から中期にかけての埋葬が検出されている[4]。これらの調査によって古墳時代人も含め、40体以上の埋葬が発掘されており、人類学的な研究や埋葬法など、弥生文化の東漸を考える上でも欠くことのできない遺跡である。

一方、町内では、古浦砂丘遺跡と並んで佐太前（さだまえ）遺跡[5]が、やはり弥生時代に成立する付近の拠点集落として知られている。

さかのぼって縄文時代には、前期の佐太講武（さだこうぶ）貝塚[6]が日本海側ではまれな貝塚として史跡指定を受けている。近年、講武盆地内では、縄文晩期系の突帯文土器と遠賀川系の土器がともに出土した北講武氏元（うじもと）遺跡[7]が知られ、徐々に縄文時代の姿が明らかになりつつある。その後、弥生時代から古墳時代には、安定したこの講武盆地を中心にして生産力の向上があったことが考えられ、盆地を取り囲む丘陵上には数多くの古墳群が築造されている。一方、南講武草田（くさた）遺跡[8]では日本の弥生時代末に相当する朝鮮半島製の瓦質土器や近畿系の土器多数が出土し、また、鹿島沖の日本海でも瓦質土器が海底から引揚げられており、日本海を往来する海上交通があったことが予想されるようになってきた。

古浦砂丘遺跡が営まれたころ、砂丘の内陸側は潟湖であったと考えられ、その周辺部が初期水稲耕作地として利用されていたものと考えられる。この潟湖は、『出雲国風土記』には恵曇（えとも）陂（つつみ）として、沖積され小さくなった姿が描かれている。

この恵曇陂のほとりの山懐には、銅鐸２口と銅剣６本を埋納した志谷奥遺跡[9]があり、付近の集落での祭祀具を埋納したものと考えられる。

また、古浦砂丘は、『出雲国風土記』に「恵曇濱（えともはま）」として見え、「廣さ２里１百80歩あり。東、南は並びに家あり。西は野、北は大海なり。即ち浦より在家に至るまでの間、四方並びに石木なく、白砂の積もれるがごとし。大風の吹くときは、其の沙、或るは風の随に雪のごとく零り、或るは居ながら流れ、蟻のごとく散りて、桑麻を掩覆ふ。」と風土記中屈指の具体的な記述がある。

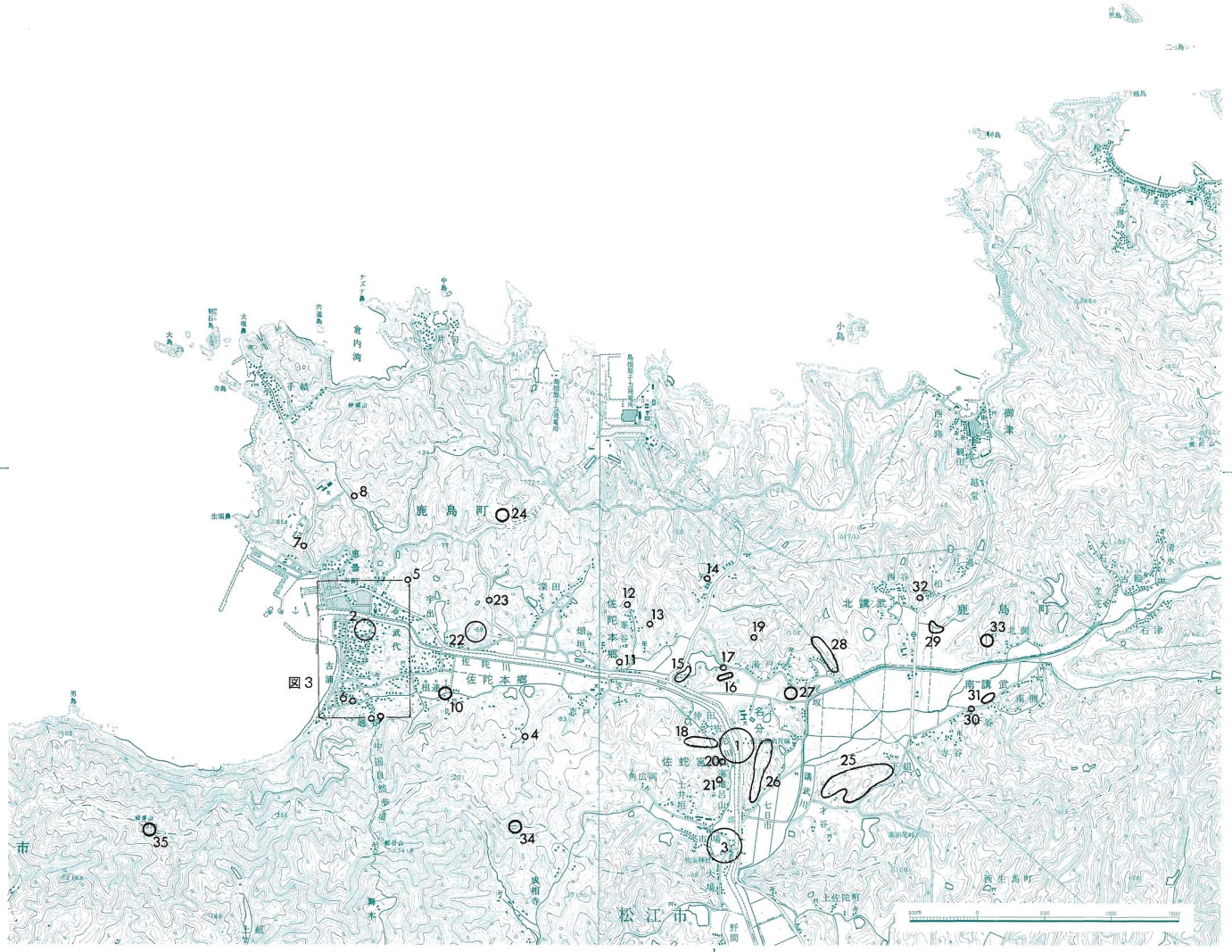



図2　調査地と周辺の遺跡（1/50000）

# Ⅲ．調査の概要

鹿島町特定環境保全公共下水道事業に際して、鹿島町教育委員会では、古浦砂丘遺跡が1960年代を中心とする調査地の周辺にも広がっている可能性が高いこと、調査地は墳墓であり、住居などは別の地点に形成されていたことも予想され、遺跡はさらに広がりをもつことが考慮されることから、遺跡の取扱いについて、鹿島町上下水道課と協議を行い、大字古浦地内での下水管敷設には基本的に立会いを行うこととした。

また、町教育委員会では、1985年度に試掘調査（付編参照）を行っており、戦後の採砂を免れた砂丘上にもクロスナ層が良好に残存することを把握していたためでもあった。ただ、遺跡の広がりは未確認であった。

一方、平成３年度中にすでに下水管が敷設されて、立会いを行うことができなかった管路122では、工事に伴う排土に多くの遺物を含み、遺跡の中を掘削したものと考えられたため、採集した遺物を図20に掲載した。この排土そのものも黒ずんでおり、クロスナ層を掘り上げたと考えられるものであった。

下水管の埋設に立会う方法で行った調査は、クロスナ層の露出を目安として行った。砂丘活動の停止期に人の生活が行われ、それが結果として有機物を含むクロスナ層として堅固な地層をつくることが判明しているからである[10]。砂丘遺跡の調査ではこのクロスナ層の検出が一つの目安となっている。

こうして下水管敷設の業者の舗装路面切断や掘削に立会い、クロスナ層の出土を認めれば、発掘調査に切り替えるという方法で行った。遺構、遺物が認められない場合でも、掘削途中や掘削が終了した時点で壁面の清掃を行い、土層図を作成した。結果、かなりの土層図を作成したが、ほとんどが中・近世に堆積したと考えられる黄褐色を呈する新鮮な砂層内で収まるもので、遺構、遺物を含まず、いわゆるクロスナ層に届く管路は少なかったため、一部を掲載するにとどめる。この立会で明らかなクロスナ層を検出したのは、管路187、管路137のみであった。

以下、掲載した管路について説明する。

## １．各管路の状況

**管路182**（図５、６）　砂丘の北部の頂点付近（標高約９m）から西斜面に向けて掘削された管路である。1960年代の調査地にも、1985年度の試掘調査地にも比較的近い地点ではあったが、深さ0.9mから地点によっては２m以上掘り下げたが、新砂丘の白砂層のみで、クロスナ層や遺物の検出はなかった。砂丘上では標高７m近くまで、砂丘西裾では標高約５mまで掘削が到達した。

**管路180**（図６、７）　管路182と砂丘西裾で接合し、裾にそって南に延びる町道路面（標高約６～8.5m）に掘られた管路である。マンホール設置地点での最深部では、地表から3.5m（標高約5.5m）にも掘削が及んだが、白砂層のみで、クロスナ層や遺物の包含は認められなかった。

図３　古浦砂丘遺跡推定地と立会をおこなった下水管路（１/5000）

**管路191**（図７）　管路180の南側で、砂丘の西裾（標高約７m）をさらに南に向かう管路である。２区付近では、土層に汚れが見られ、舗装以前の旧路面と考えられた。１区付近では薄いが黄褐色土を認めており、近世、近代の地表面を示すものと考えられた。この部分の標高は約6.2mである。古浦集落は、砂丘南方が戦前まで集落の中心をなしており、これを裏付けるものと考えられる。遺物などは認められなかった。

**管路190**（図８）　管路191の南側に接続し、砂丘裾（標高約７～６m）の路面をさらに南に向かう管路である。ここでは大半が白砂の堆積であったが、２区南端で若干の土層の乱れや生活にともなうと考えられる土壌の汚れが、淡褐色砂として認められた。やはり、近世、近代の地表面を示すものと考えられる。遺物などはなかった。

**管路189**（図８）　管路190の南側に接続し、西に折れて海岸に向けて降る短い管路である（標高約６～５m）。ここでも舗装以前の旧路面やそれにともなう排水管、若干の土層の汚れが見られた。ここでは暗褐色砂の堆積を認めたが、これはごく薄く、近世、近代の地表面と考えられた。遺物などは認められなかった。

**管路196**（図８、９）　管路191と管路190の接点から砂丘西斜面をのぼる町道に掘削された管路である（路面の標高約７～13m）。斜面では１m強からマンホール部で約２mが掘削されたが、クロスナ層や遺物は検出しなかった。標高約13mの砂丘上のマンホール部では2.3mの深さで掘り下げ、標高約11.3mに至ったが、新砂丘の白砂層のみで、クロスナ層は認められなかった。

**管路197**（図９、10）　砂丘南部での頂点付近から管路196と接し、北へ向かう路面（標高約13m）に掘削された管路である。地表から約２mの深さで掘削し、マンホール設置の最深部では約2.5mの深さ（標高約11m）まで掘削が及んだが、新砂丘の白砂層のみで、クロスナ層や遺物は認められなかった。

**管路198**（図10、11）　砂丘上で管路197と接し、砂丘上を東西および屈曲して南北に掘削された管路である。標高約13.5m前後の地表から約1.3～1.7mの深さ（標高約12m）では、新砂丘の白砂層のみで、クロスナ層は認められなかった。砂丘上面の南端に近い３区から４区にかけて、標高12m前後で薄い淡褐色砂層と灰褐色砂層を認めているが、遺物や炭化物も伴わず、クロスナ層とは考えられなかった。

**管路137**（図11）　砂丘の北部の頂点付近（標高約10m）を南に向かって掘削された管路である。付編として掲載した1985年度の試掘調査で、隣接地でのクロスナ層の存在を確認していながら、十分な立会が行えず、北端でのみ深さ0.9m（標高約９m前後）で茶褐色砂層が存在することを確認する程度の観察しかできなかった。また、観察した部分では、道路を横断する排水管が埋設されており、この茶褐色砂層を掘り抜き、土層を乱していた。

この管路隣接地での試掘調査では、クロスナ層は暗褐色を呈し、古墳時代後期から奈良時代の遺物を包含することを確認している。管路137の茶褐色砂層は、これに続く同一のクロスナ層であったと考えられるが、遺構、遺物をここでは認めることができなかった。茶褐色砂層の厚さは、30～40cmであった。

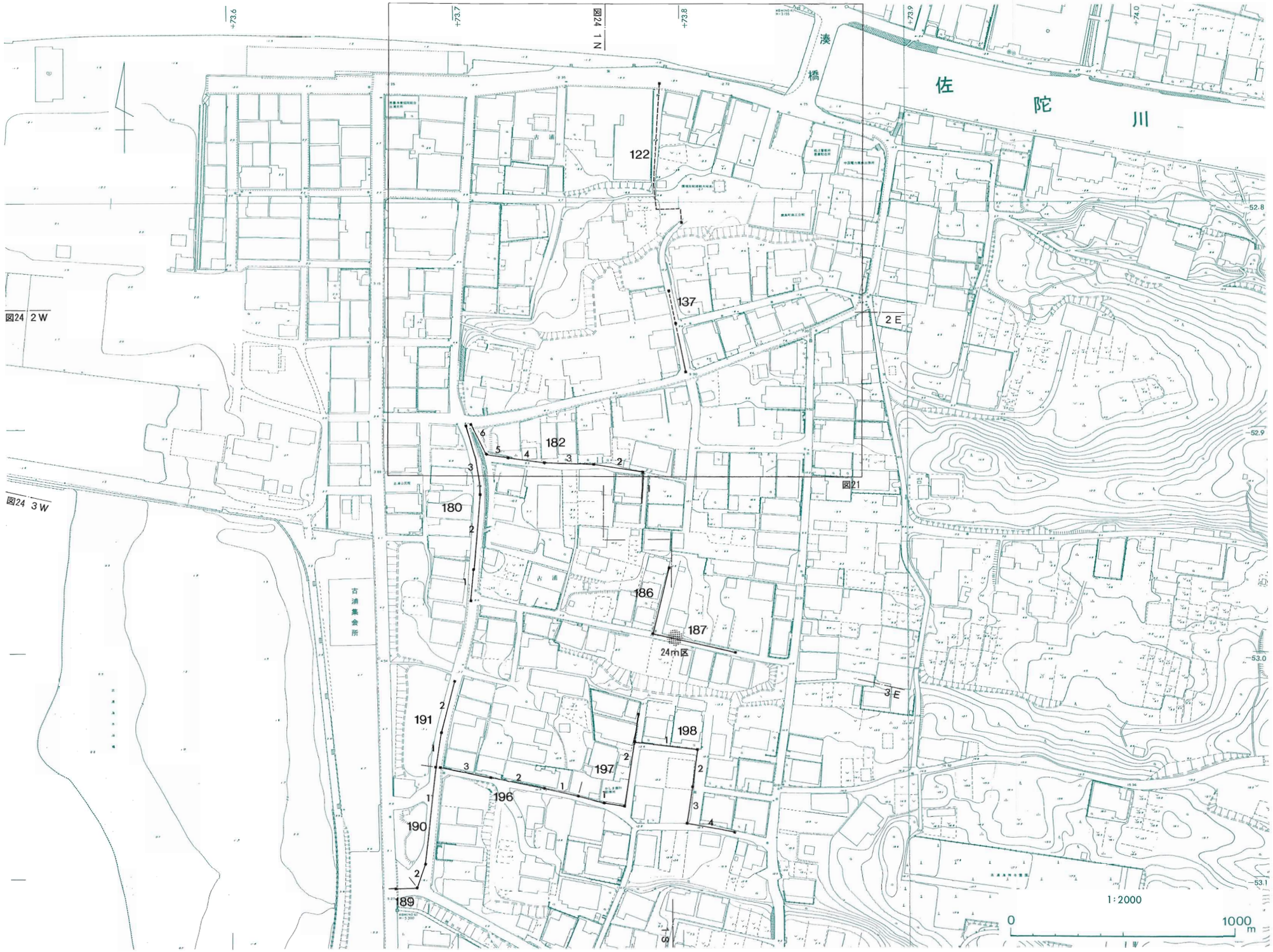



図４　土層図掲載の下水管路（１/2000）

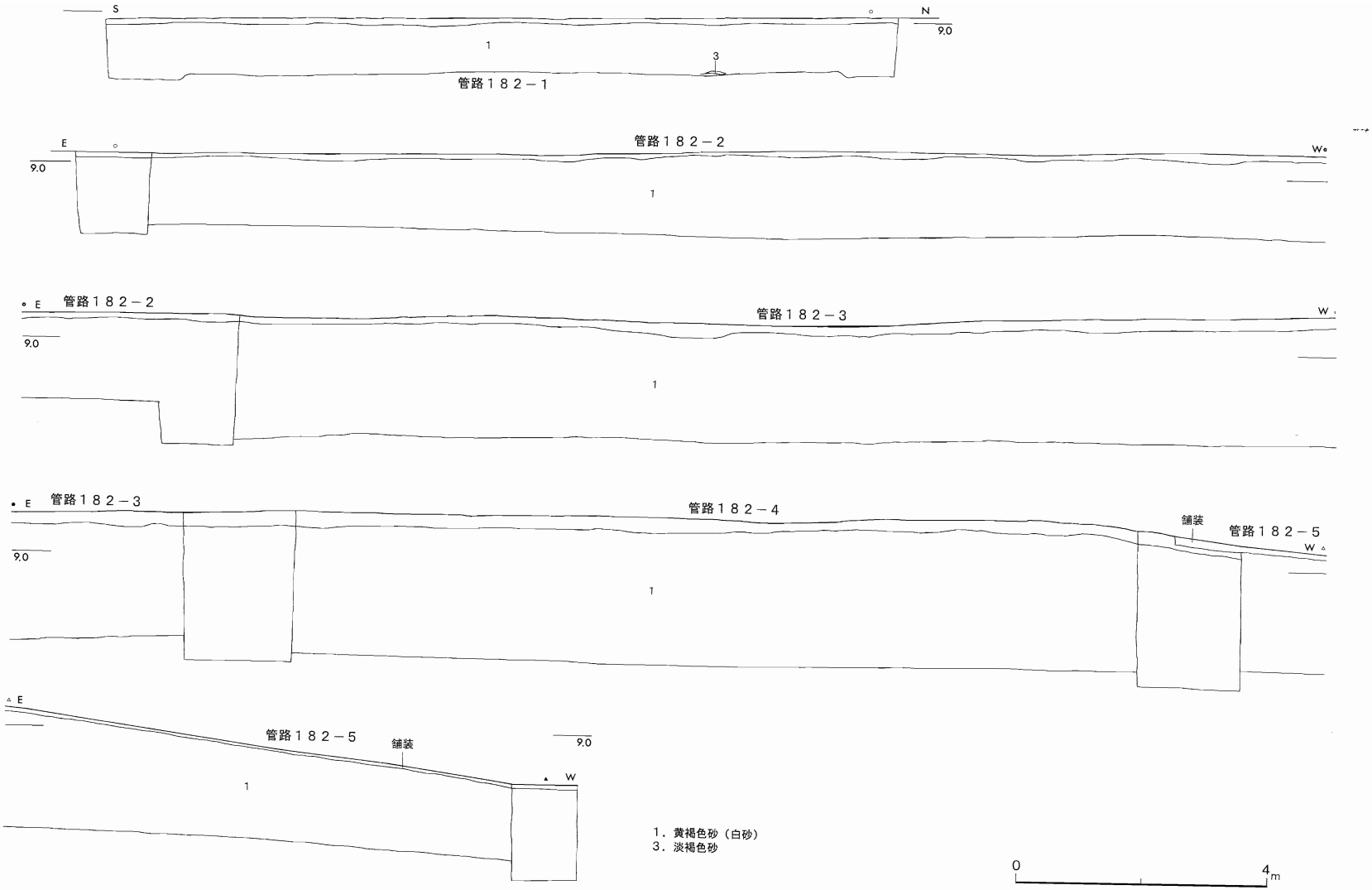

S
N
9.0
1
3
管路１８２－１
E
9.0
管路１８２－２
W
1
E
管路１８２－２
9.0
管路１８２－３
W
1
E
管路１８２－３
9.0
管路１８２－４
舗装
管路１８２－５
W
1
E
管路１８２－５
舗装
9.0
W
1
1．黄褐色砂（白砂）
3．淡褐色砂
0
4m

図５　下水管路土層図（１）

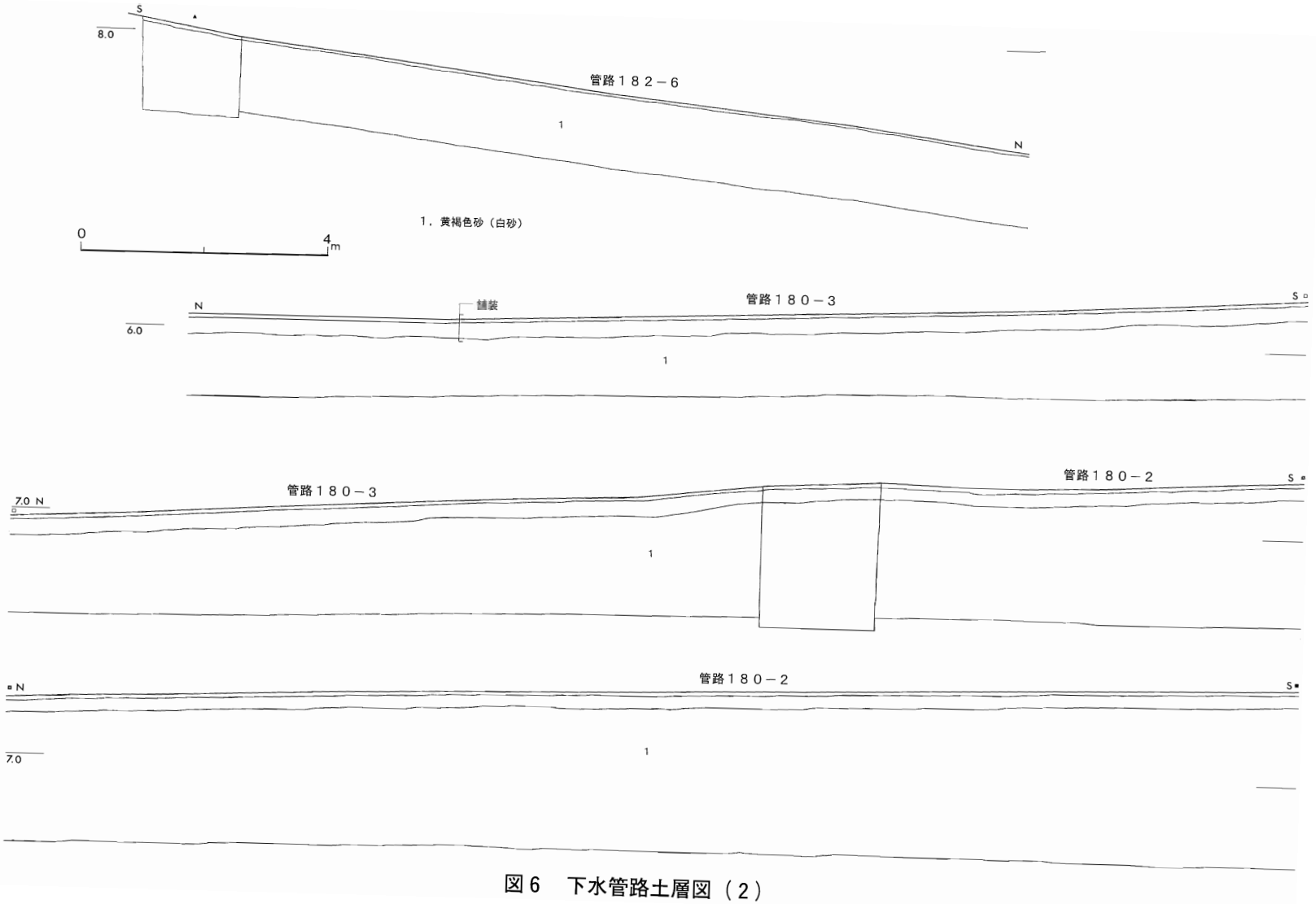

S
8.0
管路１８２－６
1
N
1．黄褐色砂（白砂）
0
4
m
N
舗装
管路１８０－３
S
6.0
1
7.0 N
管路１８０－３
管路１８０－２
S
1
N
管路１８０－２
S
7.0
1

図６　下水管路土層図（２）

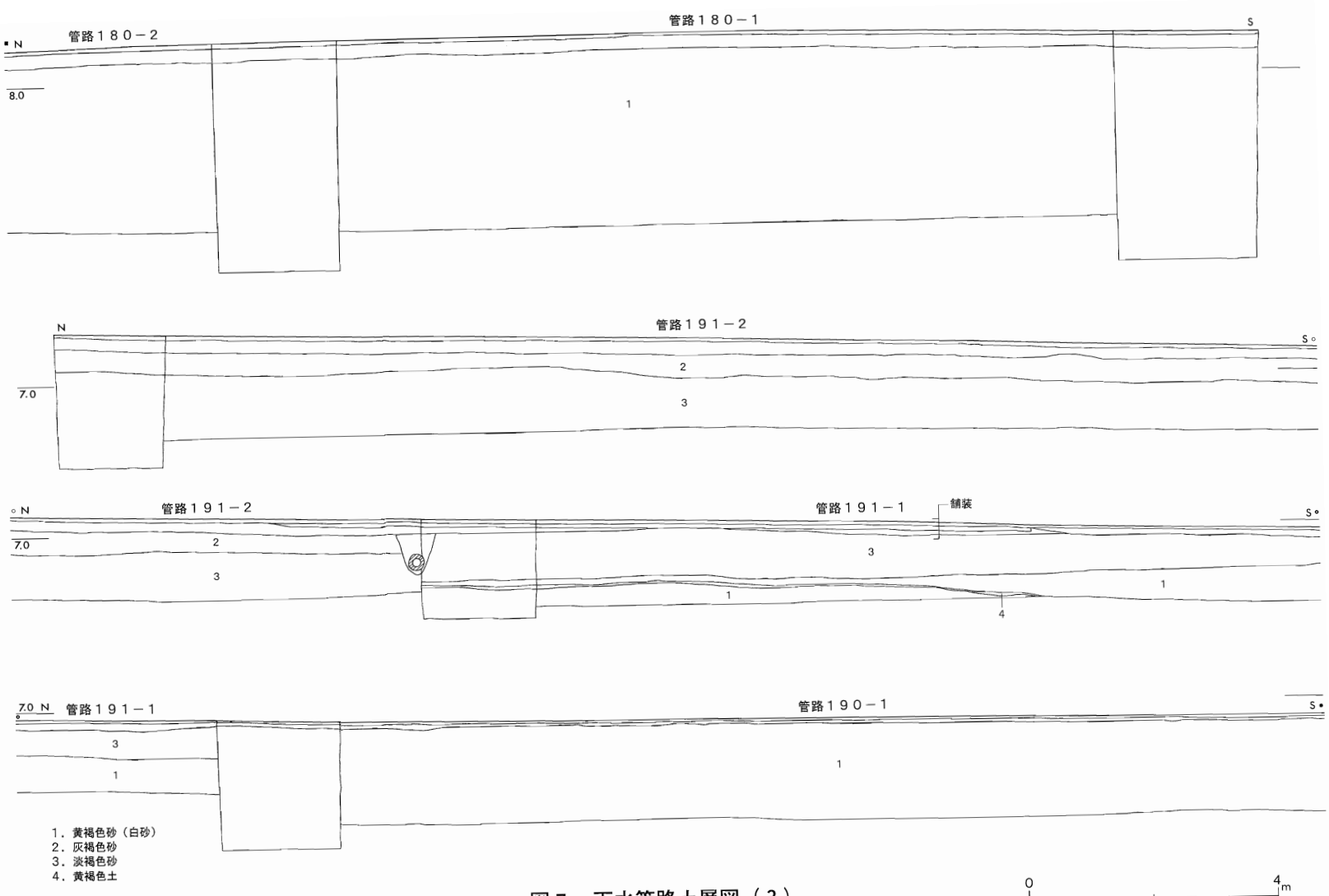

管路１８０－２
管路１８０－１
N
S
8.0
1
N
管路１９１－２
S
7.0
2
3
N
管路１９１－２
管路１９１－１
舗装
S
7.0
2
3
3
1
1
4
7.0 N
管路１９１－１
管路１９０－１
S
3
1
1
1．黄褐色砂（白砂）
2．灰褐色砂
3．淡褐色砂
4．黄褐色土
0
4
m

図７　下水管路土層図（３）

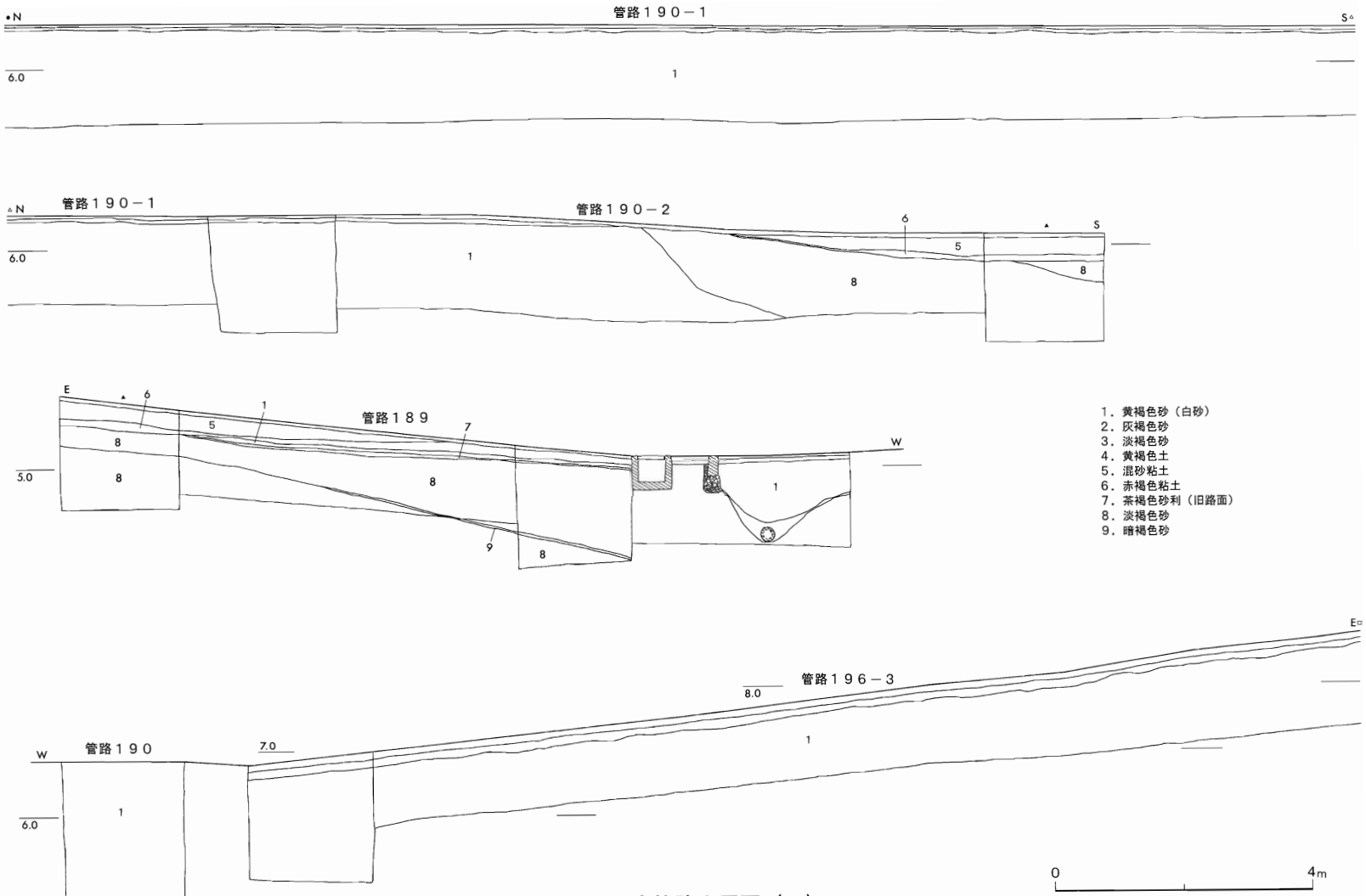

N
管路１９０－１
S
6.0
1
N
管路１９０－１
管路１９０－２
6
S
5
6.0
1
8
8
E
6
1
管路１８９
5
7
W
8
5.0
8
8
1
9
8
1．黄褐色砂（白砂）
2．灰褐色砂
3．淡褐色砂
4．黄褐色土
5．混砂粘土
6．赤褐色粘土
7．茶褐色砂利（旧路面）
8．淡褐色砂
9．暗褐色砂
E
管路１９６－３
8.0
1
W
管路１９０
7.0
1
6.0
0
4m

図８　下水管路土層図（４）

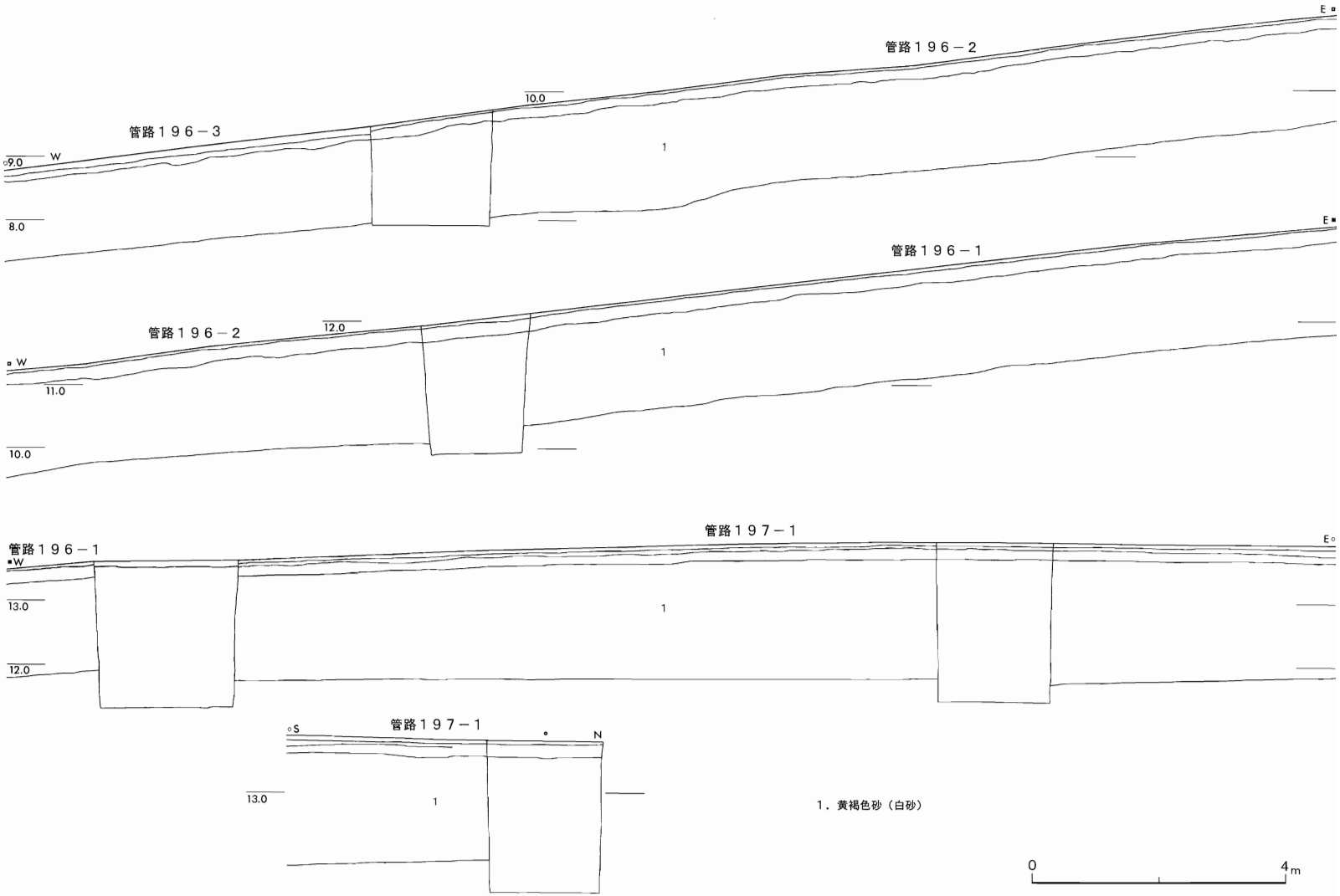

管路１９６－２
E
10.0
管路１９６－３
W
9.0
8.0
1
管路１９６－１
E
管路１９６－２
12.0
W
11.0
10.0
1
管路１９７－１
E
管路１９６－１
W
13.0
12.0
1
管路１９７－１
S
N
13.0
1
1．黄褐色砂（白砂）
0
4m

図９　下水管路土層図（５）

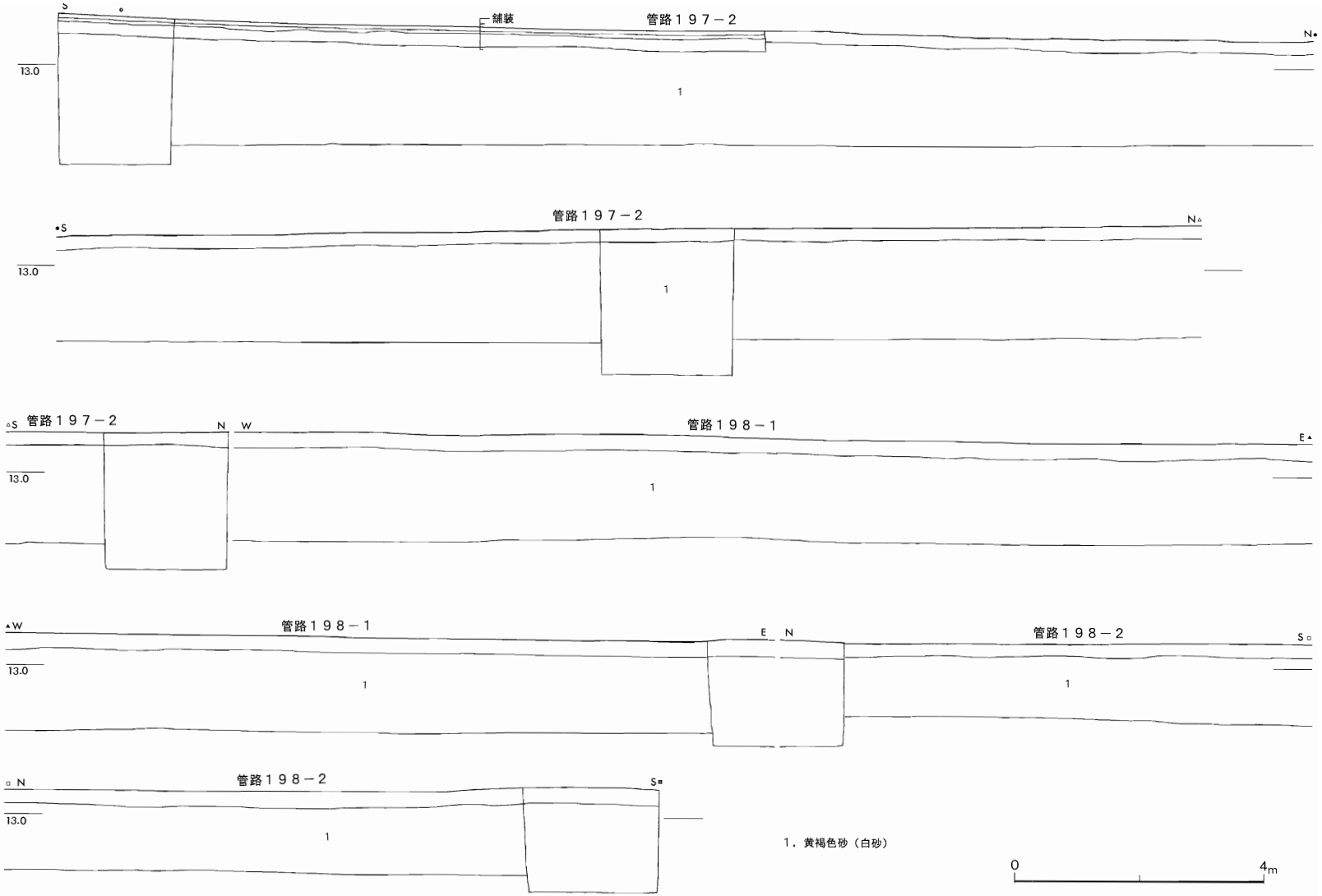



図10　下水管路土層図（６）

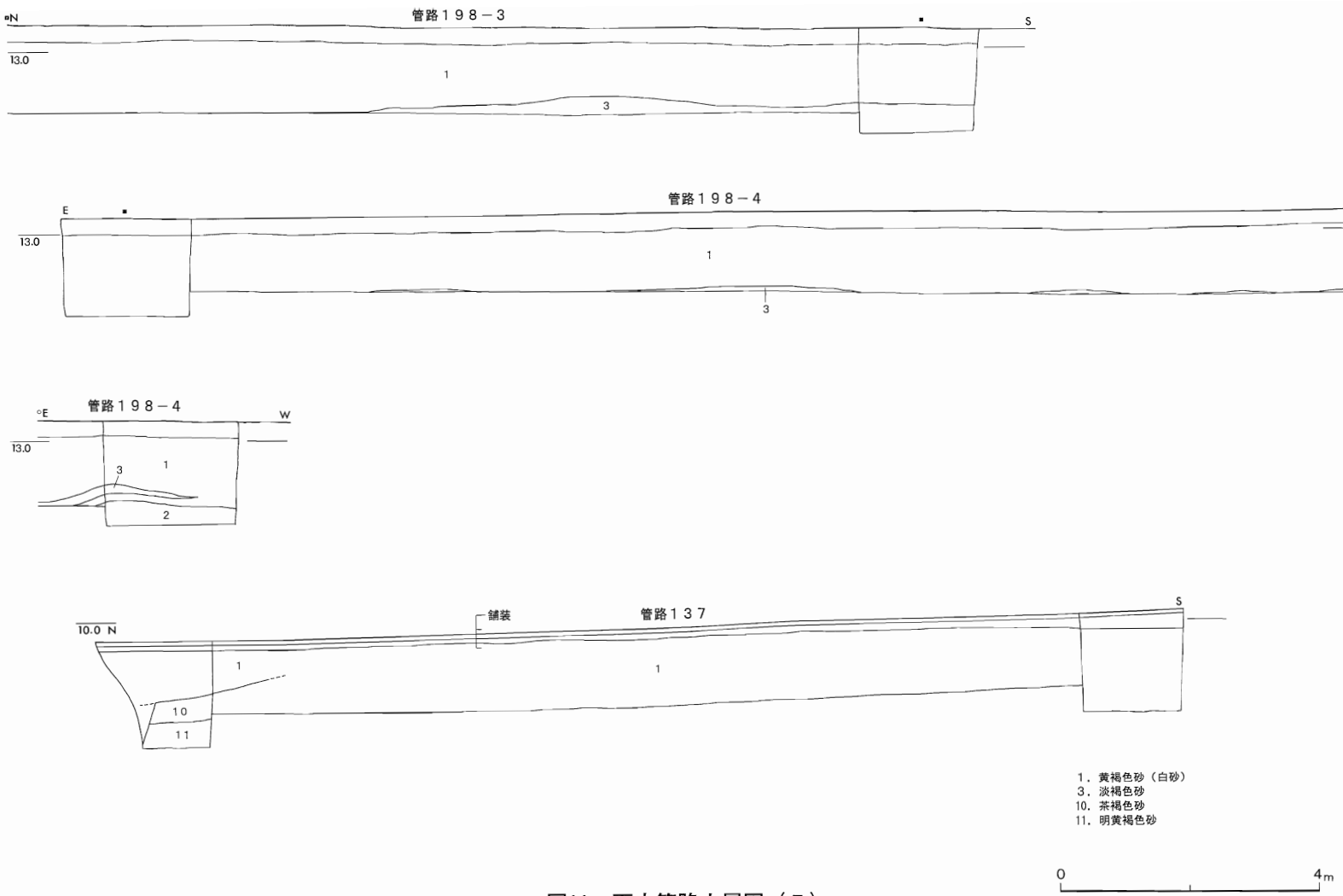
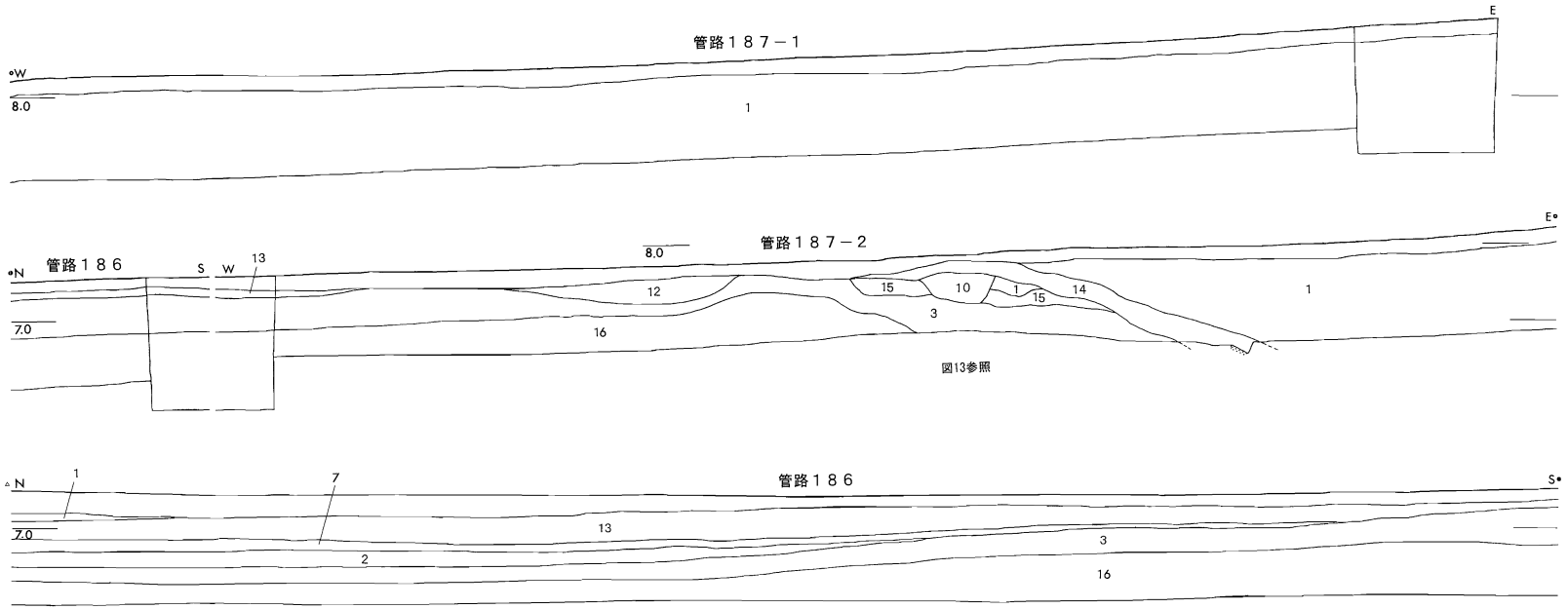
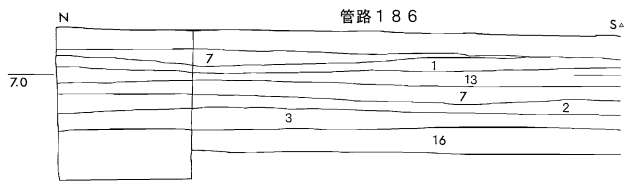



図11　下水管路土層図（７）




1．黄褐色砂（白砂）
2．灰褐色砂
3．淡褐色砂
7．茶褐色砂利（旧路面）
10．茶褐色砂
12．縞のある淡黄褐色砂
13．灰色砂
14．黒褐色砂
15．淡茶褐色砂
16．黄褐色砂




0　4m

図12　下水管路土層図（８）

## 2．管路187の状況

管路187は、砂丘の鞍部を東西に延びるもので、東端のマンホール部から掘削が進められた。当初は黄褐色のいわゆる白砂の堆積であったが、24mほど掘削が進んだところで、文字どおり黒褐色のクロスナ層が現われ、この層中には土器や貝など遺物を含んでいた。この地点を管路187　24m区と呼称した。遺構を確認しようと、機械での掘削を手掘りに切り替え、分層を行いながら遺物の取上げを行った。しかし、管路の側壁は軟弱な砂層のため、崩落を防ぐ支持材を設置しながらの幅約1mの溝中での調査であったので、遺構の有無の確認や包含層全体の写真撮影などはできなかった。この包含層は約6mの長さにわたって検出した。クロスナ層頂部の標高は7.8mであった。

クロスナは4層に分層できた。最上層の黒褐色砂は、4層中最も堅く、遺物を多く含んでいる。東に向かって降ってゆき、これを白砂が覆っている。西側では現在の路面に削られて消失する。層東側の傾斜下部に土器、石器や貝殻がまとまっていた。また、鯨骨加工品**14**も層中から回収した。この下層に黄褐色砂と淡褐色砂があり、また、これを掘り込む茶褐色砂がある。それぞれが遺物を含む包含層で、特に茶褐色砂は貝も多く含んでいた。平面形は確認できなかったが、断面にあらわれた茶褐色砂の土層を見ると、土坑ないし溝があった可能性がある。淡茶褐色砂もわずかだが遺物を含んでいた。この下位にある淡褐色砂は、遺物は含まないが、よく締まった層であった。

この地点の西側や、屈曲して北に続く管路186では、他の地点での新砂丘と考えられる白砂とは異なり、わずかに有機物を含んだ褐色味を帯びた砂の堆積が認められた。遺物などの出土はなかったが、24m区のクロスナ各層のベースとなる旧砂丘の一部と考えられる。

この管路187　24m区地点では、層で観察するかぎり、クロスナ層の東に降る斜面を検出したことになる。後述する出土遺物からわかるように斜面と平坦面をなす黒褐色砂層は、古墳時代初頭に位置づけることができる。ごく限られた地点での観察ではあるが、この時代の砂丘は、この付近に東へ降ってゆく斜面をもつ、南北に細長く、標高8m程度の低いものであったことがうかがえる。

一方、ここから約90m西方の管路180南端のマンホール部では、地表下約3.5m（標高5m）までの掘削でもクロスナ層は認められなかった。ここまでの間でクロスナ層は途切れるか、さらに深い地点にクロスナ対応層がもぐりこんで旧砂丘の西端である裾（海岸）があるものと考えられる。

さらに図3、4、24に見るように、この地点は、砂丘が東西方向に谷状の地形をなしている鞍部に位置する。この東西方向に伸びる幅約100mの谷状の地形は、長さ約500mにわたって認められ、現在の砂丘をほぼ横断するものとなっている。この谷は、砂丘に風が吹きつける方向に沿っており、季節風によって形成された地形と考えられる。管路187　24m区で、現在の路面直下に包含層が存在するのは、本来存在したであろうこの時代以降の上面を覆った砂そのものが、中世以降の砂丘の東側へ伸びてゆく形成活動によって失われているものと考えられた。さらにこの地点では、これ以降の堅固なクロスナ層が形成されなかったか、形成されても堅固な層とならなかったために、砂丘の脆弱なこの地点に季節風による谷が形成された可能性も考えられる。

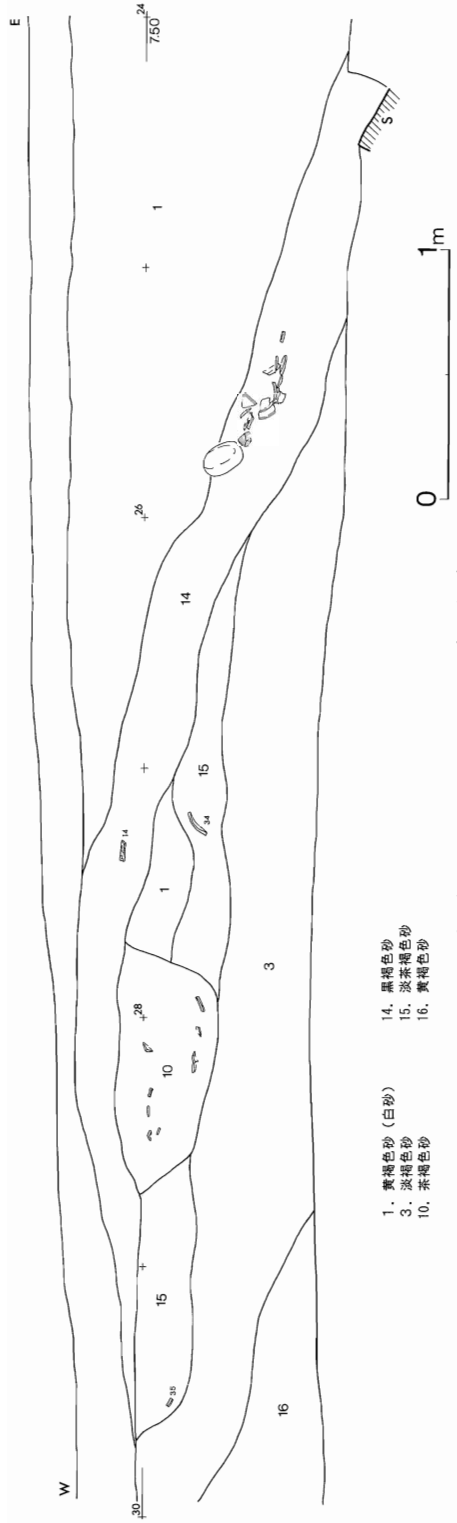



図13　管路187　24m区土層図（1/30）

### 3．24m区出土遺物

**黒褐色砂出土遺物**（図14、15）　この地点に限らず、この砂丘から出土する土器は、地表に長く曝されたと考えられるものを除いて、一般に保存状態がよく、調整など細部を観察できる。甕**1**は、やや内傾して比較的高い口縁部に球形に近い体部、かすかな平底をもつ。複合口縁部は水平方向に突出する。口縁端部は凹線状になるまでナデられている。肩部にはクシ状工具による波状文をもつ。底部付近の内面には指頭圧痕をとどめる。甕**2**はゆるやかに外傾する口縁部で、端部は軽く外方に折り曲げ、丸くおさめる。甕**3**は、素直に伸びる口縁部に、なで肩の体部が続く。肩部には粗いハケを装飾的に1周させる。甕**4**も同大のものだが、倒卵形の体部をもち、肩部には粗い装飾的なハケの下に、貝殻口縁を間遠く押捺する文様を施す。底部近くの内面には指頭圧痕をとどめる。甕**5**も複合口縁のもので、端部は軽く外方に折り曲げる。甕**6**は全体に丸みを帯びたつくりである。底部**7**は、かすかな平底をとどめ、内面に指頭圧痕が認められる。大形の甕**8**は、直立する高い口縁部をもち、端部はなでて平坦面をつくる。内面はヘラケズリののち、部分的なヘラミガキが認められる。小形丸底壷**9**は、短く内湾させる単純口縁に球形の体部が続く。胎土は精選され密である。内面は丁寧になで、体部外面上半はハケ、下半はヘラケズリを行なう。**10**は低脚杯の脚部、**11**は鼓形器台で、筒部は最大まで縮約し、かつての筒部内面は、稜線状になっている。**12**は1条のタガ状突帯がめぐる。壷などの口縁ないし体部片と考えられるが、内面まで丁寧になでられることから、口縁部の可能性が高い。**13**は土器群とともに出土した敲石で、1面の中央に敲打痕をとどめる。**14**は鯨骨加工品で、板状に加工され、裏面は破断面となっている。表面には端部近くに細い罫書き線が1条あり、もう一端には手斧様の工具による加工痕が残る。

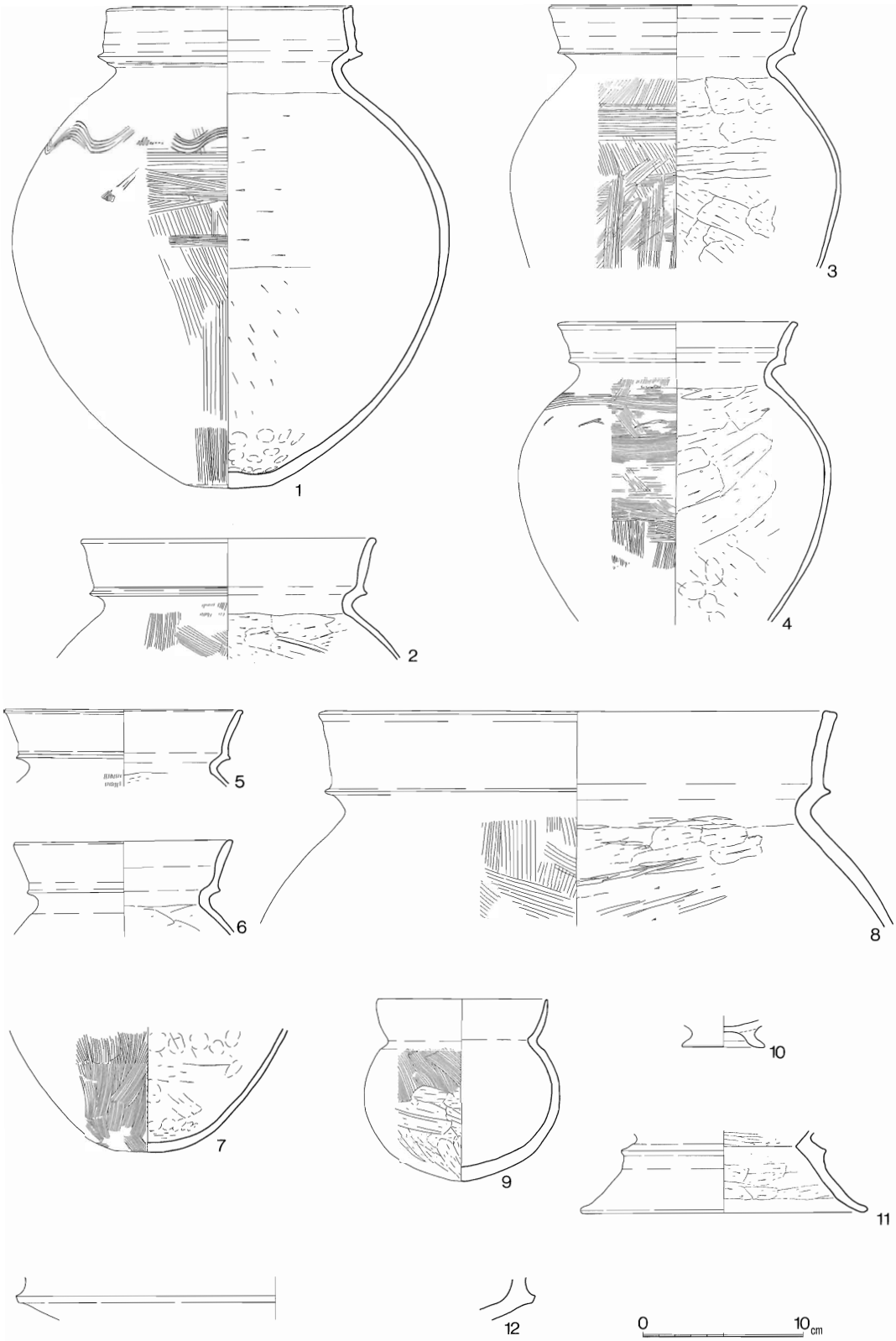



図14　24m 区黒褐色砂層内出土遺物（１）

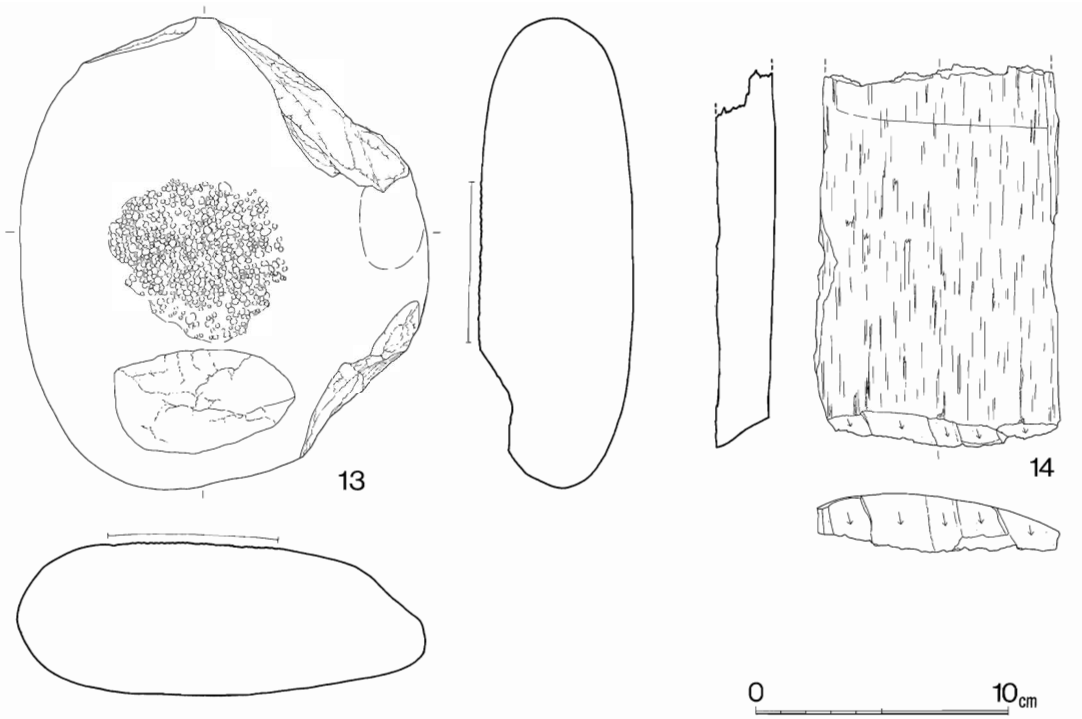



**図15　24m 区黒褐色砂層内出土遺物（２）**

この層出土の土器は、その様相から、弥生時代末から古墳時代初頭のものと考えられ、南講武草田遺跡の遺物に照らせば[11]、草田６～７期に相当するものと考えられる。

層検出の自然遺物には、サザエの殻と魚の歯が含まれていた（付　２参照　以下同）。

**茶褐色砂出土遺物**（図16）　土坑状の落ち込みから検出した遺物で、甕が大半を占める。体部片も多いが、復元できたものは少ない。**15**～**29**は複合口縁の甕で、口縁部は上方に薄く引き上げるものが多く、複合口縁部の突出は、小さく、下方に突出するものが多い。口縁部に強いヨコナデ痕を残す**21**、端部にわずかな平坦面をつくる**26**、**28**などがある。肩部の施文がわかるものでは、平行線を描く**15**、**16**、**17**、**23**、**25**がある。また、**20**、**21**は波状文が描かれる。**27**は、ヘラ描きの３条と４条の平行線の間に肋条をもたない貝殻腹縁による刺突がある。刺突は途中で向きを変える。**28**も同様の貝殻腹縁による刺突がある。**29**は、肋条をもつ貝殻腹縁による刺突が、１条の沈線をはさんで３段に施される。

これらの甕は、頚部内面にヘラミガキを行うものが多いことが注意された。この遺跡出土のものは、調整痕が良好にとどめられており、弥生後期前半に口縁部内面の全面に施されていたヘラミガキが、全面ナデ調整となって消失する直前に、この部分にのみ痕跡的に残るものと考えられる。この時期のひとつの指標となるものと考えられる。**30**は壷で、直立に近い高い口縁は端部でわずかに外方に折り曲げる。肩部にはやはり貝殻腹縁によると考えられる波状文と平行線文がある。**31**は平底の底部、**32**は器種不明の脚部である。**33**はやや深い杯部から屈曲して口縁にいたる高杯杯部である。内外面を丁寧に磨いて仕上げる。

これら出土土器は、弥生時代後期後半のものと考えられ、草田４期に相当すると考えられる。

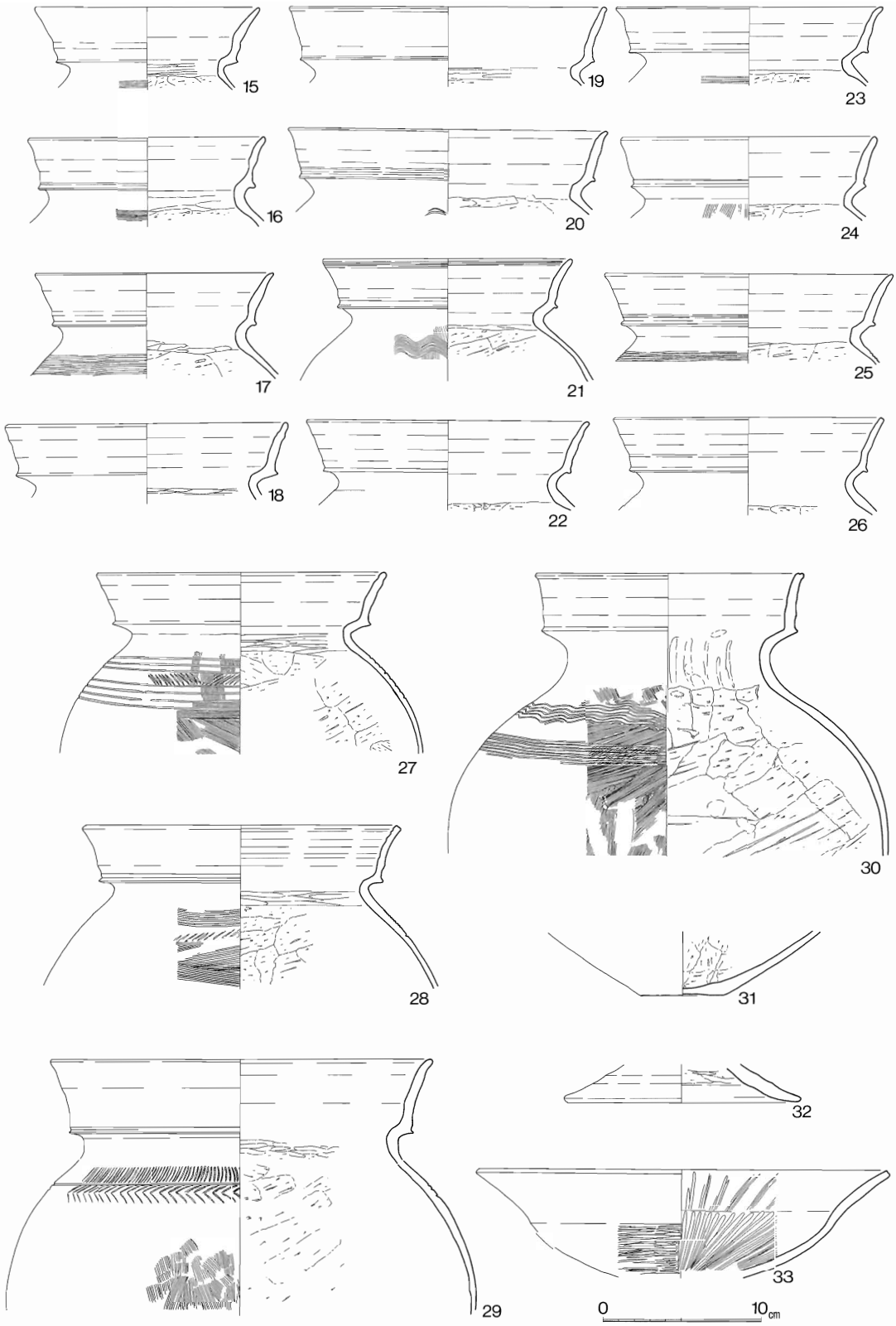



図16　24m 区茶褐色砂層内出土遺物

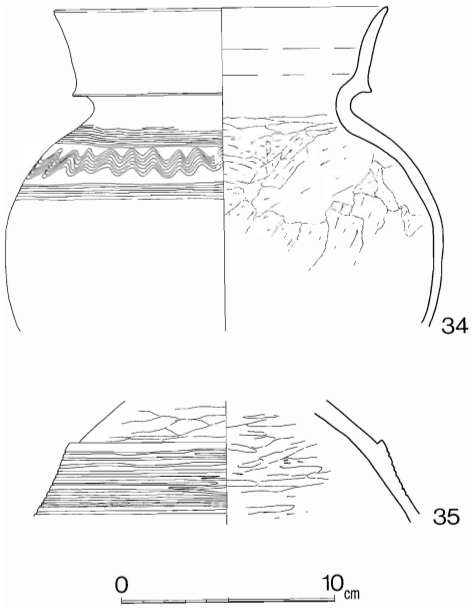



図17　24m 区淡茶褐色
砂層内出土遺物

この層は貝などの自然遺物も多く、アワビ、イワガキ、チョウセンハマグリなど海産の貝のほかに、淡水産のイズモマイマイ、汽水産のヤマトシジミも含まれており、注目される。特に汽水産のヤマトシジミは、砂丘に住んだ人々の活動領域の広さを示すものか、砂丘内側の潟湖にこの時代まで汽水域が残っていたものか、日本海に注ぐ河口に生息地があるものか、興味深い資料である。

**淡茶褐色砂出土遺物**（図17）　甕34と鼓形器台35が出土している。複合口縁の甕34は、直立に近い口縁を端部に向かって薄く引き出す。複合口縁部は下方に向けて突出する。肩部には肋条をもつ貝殻腹縁による平行線と波状文がある。内面の体部下半はヘラケズリの後、なでて仕上げ、上半のようなケズリ痕を残さない。鼓形器台35は、下台部片で、外面にはヘラ描きの沈線がある。内面はヘラケズリののち、ヘラミガキを行う。筒部のいくらか長く残る器形であろう。

この層にも貝などの自然遺物が含まれ、アカフジツボなど海産の貝のほかに、汽水産のヤマトシジミ、淡水産のオオタニシが含まれていた。

**調査前出土遺物**（図18、19）　調査による掘削以前に出土した遺物で、堆積していた層位が不明な遺物である。弥生時代後期から古墳時代初頭までの土器のほか、須恵器１点、石器２点、貝殻などがある。

甕36～38が弥生時代後期前半、甕39～44が弥生時代後期後半、甕45、46が古墳時代初頭のものである。鼓形器台47、48、高杯49も、弥生時代後期後半から古墳時代初頭のものに伴うものと考えられる。

大形の甕36、37は、ともに口縁外面の平行沈線を貝殻腹縁で施すが、37では、腹縁を２段にめぐらせて施文していることが表面の凹みから観察できる。甕39、40は、やや厚手の口縁で、41～44は、薄く引き出したような立ち上がりをもつ口縁である。甕45、46は、ともに口縁端に平坦面をつくる。46は全体にシャープに仕上げられている。鼓形器台47は痕跡的な筒部を残すもの、48はほとんど筒部をとどめないまで縮約したものである。高杯49は、ゆるやかに広がるやや浅めの杯部をもつもので、内外面をヘラミガキで仕上げる。

須恵器50は、宝珠状のつまみをもつと考えられる小ぶりな蓋で、身に組み合う立ち上がりは低い。

敲石51は、折損するが、表面と側面に敲打痕があり、裏面はわずかに敲打痕があるほか、磨石として使用されたようで、平滑になっている。また、熱を受けたためか、全体に赤い。52は、海岸礫の層理による剥離面を砥面として使用した砥石である。

これら遺物とともにサザエ、イガイなど海産の貝のほか、魚骨片を採取した。

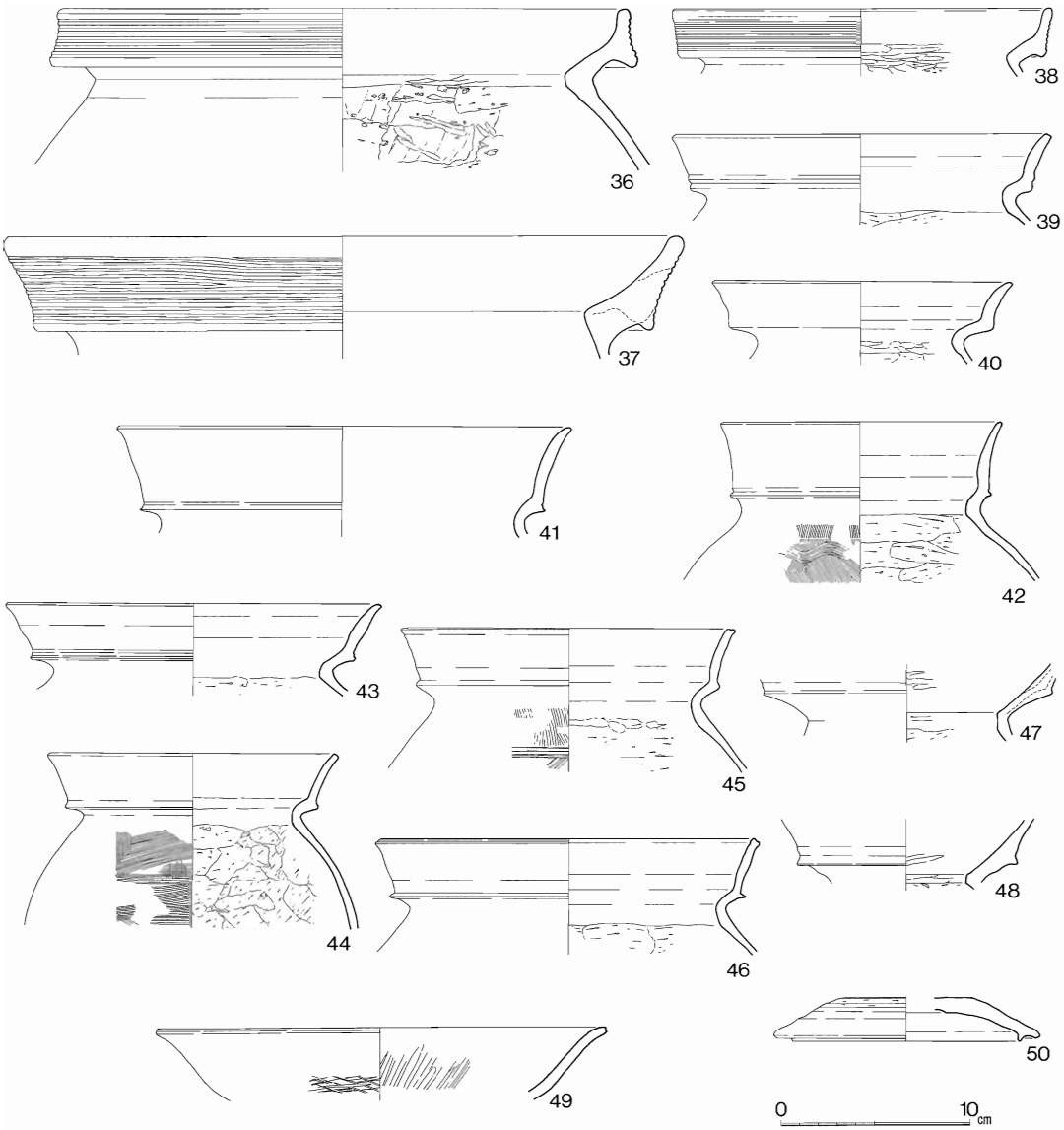



図18　24m 区調査前出土遺物（１）

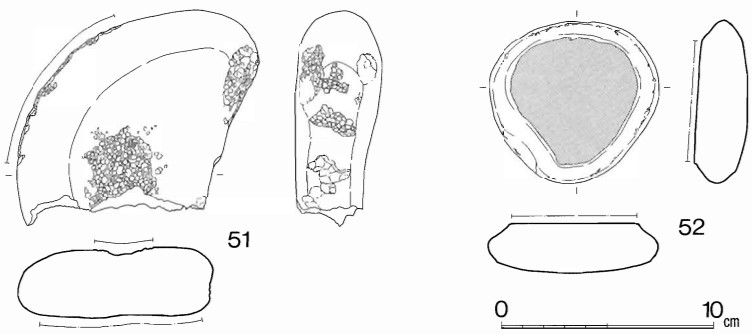



図19　24m 区調査前出土遺物（２）

## 4．管路122出土遺物

図20が管路122の排土から採取した遺物である。ビニール袋２袋の量であり、破片としては、古墳時代前期から同中期のものが大半を占め、弥生時代中期、後期のものがわずかにあり、須恵器もごく少量を採集している。弥生時代前期に溯るものは認めなかった。

**53**は、口縁端部に凹線文をもつ壷で弥生中期。精選された粘土を使い、薄手である。**54**は、甕口縁に粘土の帯を貼り付けたもので、外面は風化しているがケズリがあるようである。内面はハケメで仕上げる。朝鮮系無文土器の影響を受けたものか。**55**は平底の底部片で、内面を削る。**56**は高杯脚部で、貝殻腹縁による羽状文とヘラ描きの沈線で飾り、赤色塗彩する。弥生中期か。**57**はクシ状工具による沈線と波状文をもつ。傾きから壷肩部と考えられ、弥生時代終末から古墳時代初頭の近畿系二重口縁壷の可能性がある。**58**は複合口縁の甕で、器壁は厚く、複合口縁部の突出も鈍い。**59**は、単純口縁甕で、口縁端は内側で突帯状に肥厚する。内面にハケメをとどめる。いわゆる布留甕である。**60**、**61**もほぼ同様の器種である。**62**はさらに厚みを増した甕で、口縁端を刃物で切って平坦面としているが、切断の中途半端な部分がある。**58**から**61**が古墳時代前半、**62**はそれよりも後出のものであろう。

**63**～**66**は高杯片で、**63**は外面ミガキ、**64**は杯内面にミガキによる暗文を施す。**65**は脚部で、外面を縦方向に磨いた後、赤色塗彩する。**66**も脚部だが厚手のもの。これら高杯**63**～**66**も古墳時代前半でおさまるものと考えられる。**67**は高杯杯部ないし椀で、内外面を粗く磨き、赤色塗彩している。**68**は、須恵器長頸壷で、内面に体部と頸部の接合痕がある。古墳時代以降のものであろう。

これらの遺物を含んでいた排土は黒っぽい砂で、管路122がクロスナ層を掘削したものと考えられた。このクロスナ層は、他地点の状況をあわせ考えると、弥生時代後期と古墳時代中期わたるものないし、それぞれの２層が管路上に存在したものと考えられる。

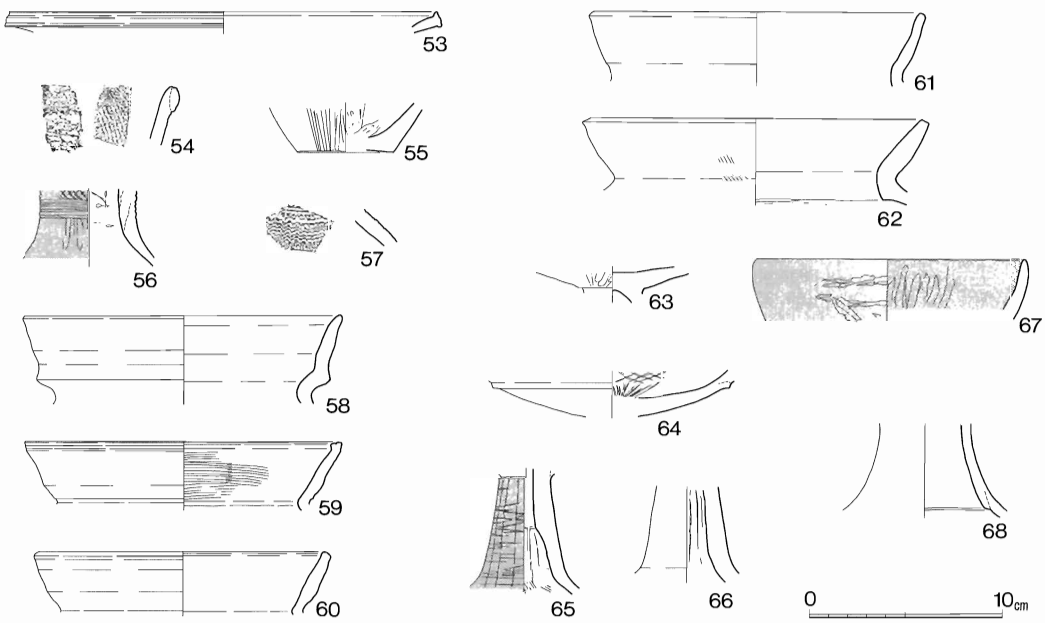



**図20　管路122出土遺物**

# 付　昭和60年度古浦砂丘遺跡試掘調査

1960年代に埋葬遺跡として調査された古浦砂丘遺跡に隣接する土地を宅地として開発する計画がもちあがり、遺跡の重要性に鑑みて、一部を町有地化することとなり、買収前に遺跡の有無を確認するため、小規模な試掘調査を実施した。

調査は、1985年11月７日に実施した。該当地に４個所の調査区を設定して行ったが、いずれの調査区でも、遺物を包含するクロスナ層を検出し、砂丘下に遺跡が残存することが判明した。この後、町有地化したのは、鹿島町大字古浦606-101番地、599m²である。

調査は、２×２ｍの試掘坑を４個所設定して行った。いずれも地表から１～1.5m に暗褐色

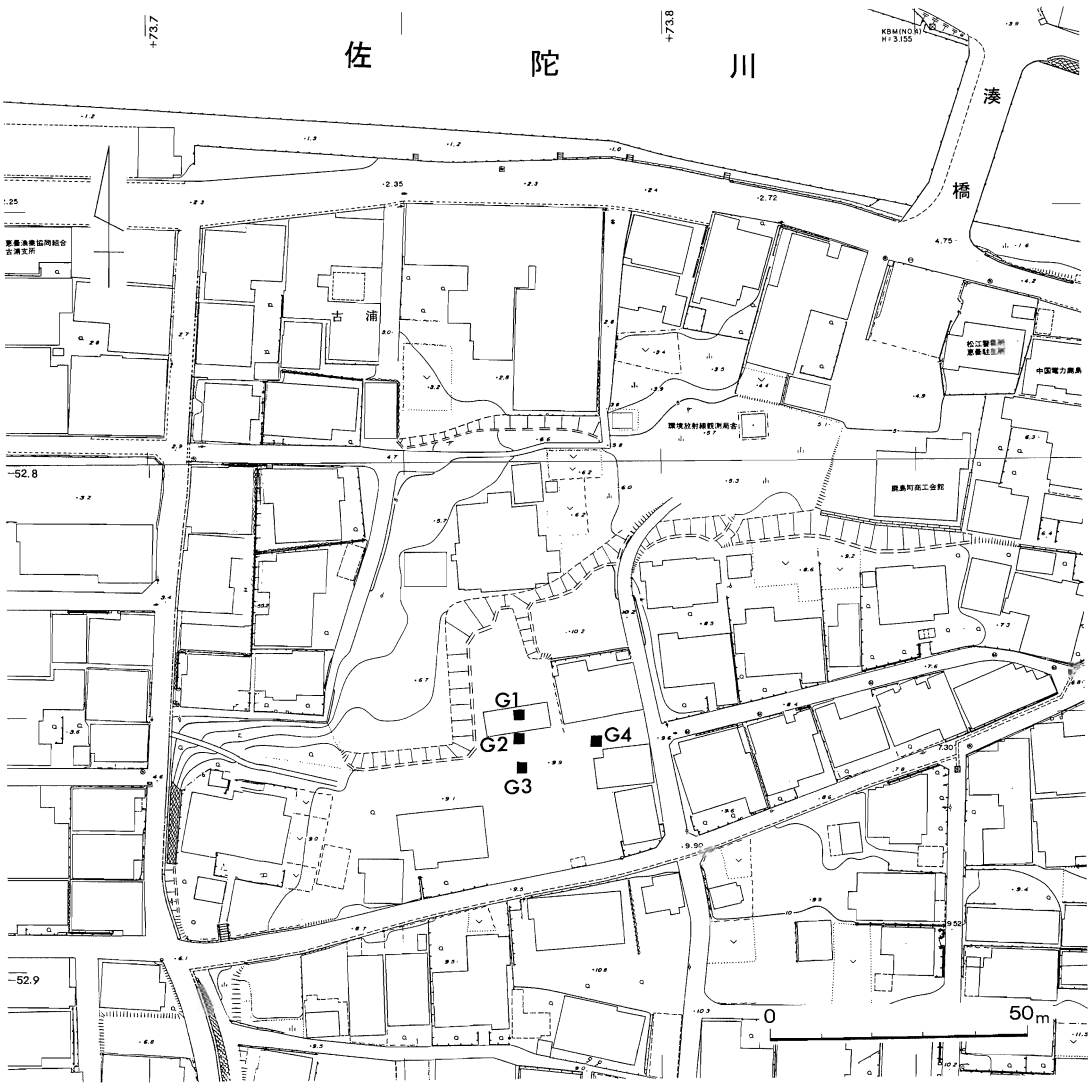



図21　試掘調査区配置図（１/1500）

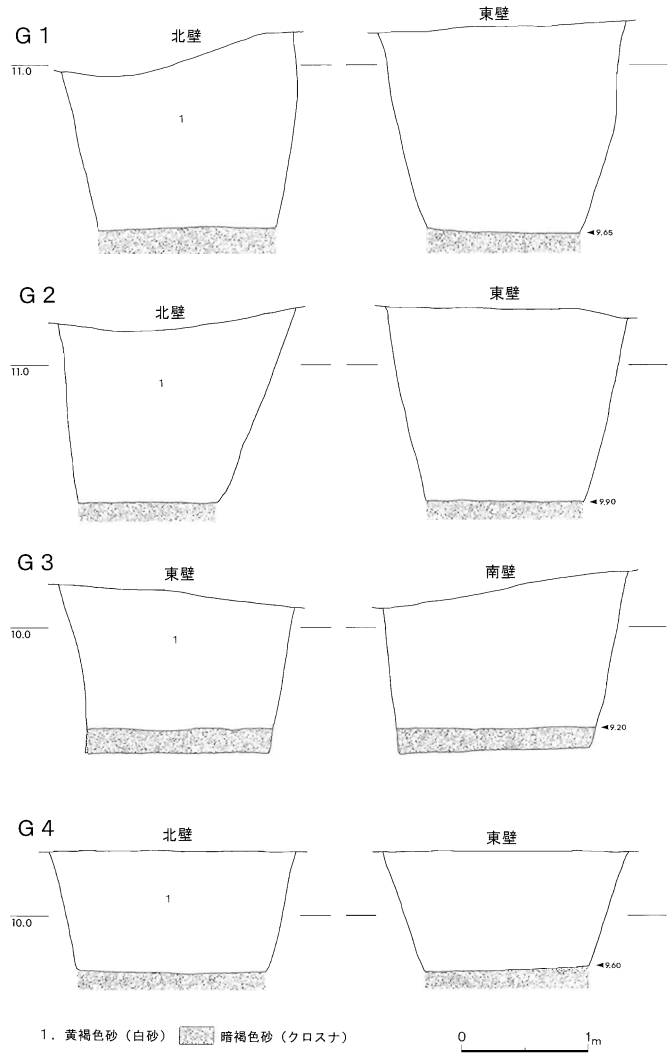



**図22　試掘調査区土層図**

で、固く締まったいわゆるクロスナ層を検出した。遺跡の有無を判断するための試掘であったため、第３調査区でクロスナ層を約20cm掘り下げたが、その他の調査区では層の存在を確認するにとどめた。第３調査区でのクロスナ層は、20cmの掘削では掘り抜けなかった。今回報告の管路137では、このクロスナ層に対応すると考えられる層を厚さ30～40cmの茶褐色砂層として確認している。

この調査でクロスナ層から検出した遺物は、古墳時代後期から古代にかけてのもので、遺跡そのものが著名となった弥生時代の埋葬を含む遺構面は、さらにこの下部に存在するものと考えられる。

試掘の結果、クロスナ層の上面は、G２の標高9.9mを最高所に、南北および東方向に傾斜していることが判明した。調査地北の環境放射能測定局舎付近では、標高約5.5mで古墳時代中期の包含層の露頭を認めており、このクロスナ層は北に向かってはさらに傾斜しているものと考えられる。しかし、今回認めたクロスナ層には、古墳時代中期の遺物は全く認められないことから、これはさらに下層の別の包含層である可能性もある。

**出土遺物**　第１調査区（G１）からは須恵器高杯**69**が出土した。G２から須恵器杯**70**、**71**が出土した。G３では、クロスナ層上面から須恵器杯**72**～**74**が、クロスナ層内から須恵器および土師器**75**～**82**が出土した。また、層内からは図示できなかったが、鉄器片４点も出土している。G４では須恵器および土師器**83**～**85**が出土した。

その他の自然遺物として、各調査区からサザエ、イガイ、コシダカガンガラ、アカフジツボなど、多くの海産貝類のほか、汽水産のヤマトシジミ、淡水産のオオタニシなど多様な貝類が出土している（付２参照）。

G１出土の**69**は、長方形の透かしをもつ須恵器高杯脚部である。古墳時代後期のものか。G

2出土の70、71はともに須恵器杯で、低い立ち上がり部を有するやはり古墳時代後期のものである。

G3クロスナ層上面の須恵器杯は、いずれも74のような底部を糸切りで切り離す、奈良時代ころのものと考えられる。G3クロスナ層内の土師器75は、内外面丹塗りの杯で、風化しており観察できないが、ヘラミガキによる暗文をもつものであろう。76～79は、それぞれ土師器甕で、円筒に近い胴部をもつ76、78と、いくらか球形の胴部をもつ77、79がある。須恵器蓋80は、やや小ぶりなもので、輪状とも宝珠状とも考えられるつまみを有する。須恵器杯は、81のように底部を糸切りするものと、82のように高台を有するものがある。いずれも奈良時代に属するものと考えられる。

G4調査区出土の遺物も須恵器杯85から、奈良時代に属するものと考えられ、83はこうした時期にみられる移動式のカマド片であろう。

このように試掘調査地点での暗褐色を呈するクロスナ層は、出土遺物から古墳時代後期から奈良時代に属し、当時の生活面を示すものであろう。調査範囲を拡大すれば、当時の住居等、集落遺跡が広がっているものと考えられる。この古代の包含層が撹乱されず残存することから、古浦砂丘遺跡が著名となった弥生時代から古墳時代の遺構面も、この地点地下にもそのまま埋蔵されているものと判断した。

一方、この古代の包含層は、『出雲国風土記』秋鹿郡恵曇濱の条に「東、南は並びに家あり」と記述される、まさにその家並みに相当する集落が存在しているものと考えられ、下層の埋葬遺跡とともに、文献の記述どおりに遺跡が存在する貴重な例でもある。

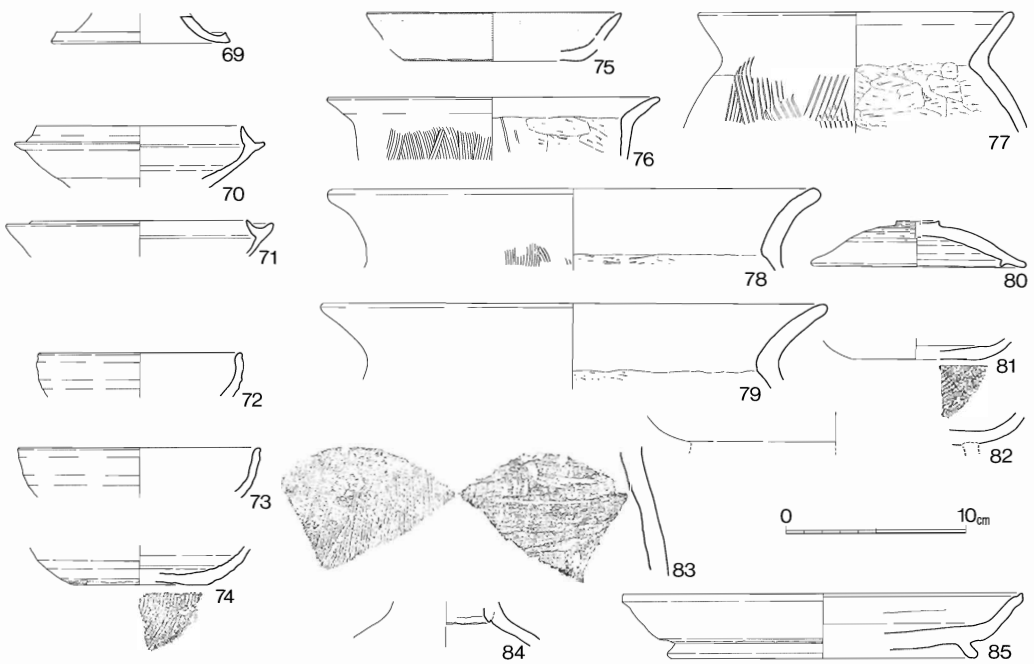



**図23　試掘調査区出土遺物**

**G1；69　　G2；70～71　　G3クロスナ層上面；72～74**
**G3クロスナ層内；75～82　　G4；83～85**

# 付2　出土貝類一覧

## 1．管路187出土貝類

黒褐色砂

サザエ　*Turbo*（*Batillus*）*cornutus* Lightfoot

魚歯？

茶褐色砂

アワビの一種（マダカアワビに類似）　cf. *Haliotis*（*Nordotis*）*madaka*（Habe）

アワビまたはサザエの破片

イズモマイマイ　*Euhadra idzumonis*（Pilsbry & Gulick）

イワガキ　*Crassostrea nippona*（Seki）

ヤマトシジミ　*Corbicula japonica* Prime

チョウセンハマグリ　*Meretrix lamarckii* Deshayes

二枚貝破片

哺乳類の骨（頭骨？）

淡茶褐色砂

オオタニシ　*Cipangopaludina japonica japonica*（v.Martens）

オオタニシの幼貝

サルボウガイ　*Scapharca kagoshimensis*（Tokunaga）

ヤマトシジミ　*Corbicula japonica* Prime

アカフジツボ　*Megabalanus rosa*（Pilsbry）

調査前出土

サザエ　*Turbo*（*Batillus*）*cornutus* Lightfoot

イガイ　*Mytilus coruscus* Gould

二枚貝破片

魚類の骨（棘突起？）

魚類の骨片

## 2．昭和60年度試掘出土貝類

G3クロスナ上面

コウダカアオイガイ　*Nipponacmea concinna*（Lischke）

カモガイ　*Lottia dorsuosa*（Gould）

トコブシ　*Haliotis*（*Sulculus*）*diversicolor aquatilis* Reeve

サザエ　*Turbo*（*Batillus*）*cornutus* Lightfoot

クボガイ　*Chlorostoma lischkei* Tapparone-Canefri

コシダカガンガラ　*Omphalius rusticus*（Gmelin）

オオタニシ　*Cipangopaludina japonica japonica*（v.Martens）

イガイ　*Mytilus coruscus* Gould
ヤマトシジミ　*Corbicula japonica* Prime
マツヤマワスレガイ？　？*Callista chinensis*（Holton）
アカフジツボ　*Megabalanus rosa*（Pilsbry）
G３クロスナ内
コウダカアオイガイ　*Nipponacmea concinna*（Lischke）
サザエ　*Turbo*（*Batillus*）*cornutus* Lightfoot
オオタニシ　*Cipangopaludina japonica japonica*（v.Martens）
ツメタガイ　*Glossaulax didyma*（Röding）
イガイ　*Mytilus coruscus* Gould
サラガイ？　？*Megangulus venulosa*（Schrenck）
アカフジツボ　*Megabalanus rosa*（Pilsbry）
哺乳類の骨
G４クロスナ上面
サザエ　*Turbo*（*Batillus*）*cornutus* Lightfoot
レイシガイ　*Thais*（*Reishia*）*bronni*（Dunker）
ムラサキインコガイ　*Septifer virgatus*（Wiegmann）
ナミノコガイ　*Latona cuneata*（Linnaeus）
マツヤマワスレガイ？　？*Callista chinensis*（Holten）

# Ⅳ. 小　結

現在の古浦砂丘は、大字古浦、大字武代、大字佐陀本郷にまたがって東西900m、南北600mの広さがある。仔細に見ると東西方向にいくつかの尾根と谷が並んで存在し、全体として砂丘を形成している。今回の調査では、砂丘のわずか一部分を垣間見たにすぎないが、管路187で見えた黒褐色砂層の東へ向かう傾きが、古墳時代初頭の砂丘の傾斜であるならば、当時の砂丘は現在に比べて非常に小さいものであったことになる。砂丘活動の停止期に人の居住が可能となってクロスナ層が形成されるのは、これまでの遺物の採取状況も合わせ考えると、弥生時代前～中期、弥生後期～古墳時代中期、古墳時代後期から奈良時代と大きく３時期があることになる。今回、下水管の埋設に立会うことによって、古浦砂丘遺跡は、現在の砂丘よりもかなり小さな砂丘上に位置すると考えられるようになった。最も新しい砂丘活動の停止期である最上層の古代の時点以降、砂丘上は居住に適さなくなり、おそらくは中・近世に砂丘は、新砂丘として、東側に拡大していったことが推測できる。

また、これ以前の古墳時代開始前後のクロスナ層が、これまで知られていた古浦砂丘遺跡の範囲よりも南側で検出されたことにより、現在の砂丘下にはこうした時代の生活面が広くとどめられていることが予測されるが、砂丘上面の標高が10～13m以上であるのに対し、その面は標高７～５m以下であり、検出には困難を伴うであろう。一方、管路187のように地表直下に包含層が存在する例は、東西方向に向く谷部の一つにあたり、上層の砂層が季節風による砂丘活動によって失われたものと考えられる。

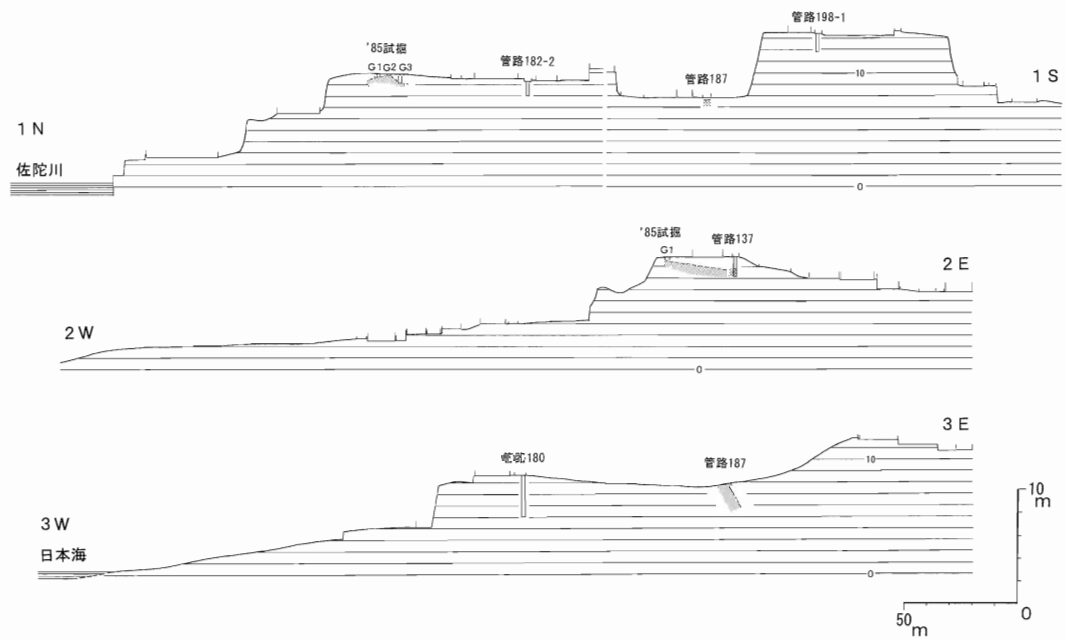



**図24　古浦砂丘と包含層の対応（水平１/3500　垂直１/700）**

弥生時代前期、遺跡が墳墓域として営まれたころには、古浦砂丘はさきに予想した古墳時代初頭のものよりさらに小規模な砂丘であったと考えられる。この砂丘の背後に存在が予測される潟湖周辺部が、初期水稲耕作地として利用されたのだろう。当時の居住域もその周辺に求めることができよう。しかし、そうした生活面は、中世以降発達した現在の砂丘東半部下深くに埋没しているものと考えられる。『出雲国風土記』に「恵曇陂」としてみえる淡水の池が、この潟湖の奈良時代の姿であろう。ただ、弥生時代に潟湖縁辺部が水稲耕作地として適していたかどうかは、この潟湖の淡水化の時期を今後明らかにする必要がある。

『風土記』が伝える嶋根郡大領社部臣訓麻呂の祖、波蘇らの運河開削譚とも読める古老伝が事実とすれば、時期は明らかではないものの、その開削時点での陂は、沖積によって、陂側の水準が海水準より高くなり、淡水化していたことを示すものではあろう。

古浦砂丘上では古代の生活面を最後に、砂丘活動の活発化によって生活に適さなくなり、集落は砂丘南方に移ってしまっている[12]。『風土記』にみえる恵曇の濱を風に砂が舞い飛ぶ様は、この後活発化する砂丘活動の前触れを奇しくも記録したものともいえよう。

---

注


1．小片　保「出雲国八束郡恵曇町古浦砂丘遺跡発掘調査報告」　1956年
2．金関丈夫・小片丘彦「着色と変形を伴う弥生前期人の頭蓋」『人類学雑誌』69巻３・４号　1962年
3．『鹿島を掘る―よみがえる伝説の資料―』鹿島町立歴史民俗資料館　1992年
4．藤田　等「島根県　古浦遺跡」『探訪　弥生の遺跡　西日本編』有斐閣　1987年
5．『佐太前遺跡』　鹿島町教育委員会　1987年
6．『下水管埋設事業に伴う佐太講武貝塚発掘調査報告書』鹿島町教育委員会　1991年
　『佐太講武貝塚発掘調査報告書』鹿島町教育委員会　1993年
7．『講武地区県営圃場整備事業発掘調査報告書４　北講武氏元遺跡』鹿島町教育委員会　1989年
8．『講武地区県営圃場整備事業発掘調査報告書５　南講武草田遺跡』鹿島町教育委員会　1992年
9．『志谷奥遺跡　銅鐸・銅剣出土地』　鹿島町教育委員会　1976年
10．豊島吉則「山陰の海岸砂丘」『第四紀研究』第14巻第４号
11．『講武地区県営圃場整備事業発掘調査報告書５　南講武草田遺跡』鹿島町教育委員会　1992年

12．近世の古浦集落は、砂丘南方の古浦天満宮を中心に形成されている。1947年アメリカ極東空軍撮影の航空写真の時点でも人家は砂丘南端と北端の一部にしか存在しない。

# 管路187　24m区出土遺物観察表（1）

| 番号 | 出土地点 | 器種 | 法量（cm） | | | 形態・手法の特徴 | 色調 | 胎土 | 焼成 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | | 口径 | 底径 | 器高 | | | | | |
| 1 | 黒褐色砂 | 甕 | 15.2 | 5.2 | 30.2 | 内傾する複合口縁部に球形に近い体部。底部は平底をととめる。肩部に波状文。 | 淡茶褐色 | 2mmの砂粒少量。金雲母を含む。 | 良好 | |
| 2 | | | 18.1 | — | — | 端部を外方にわずかに折り曲げる口縁部。 | 淡赤褐色 | 1mm以下の砂粒多い。 | 良好 | |
| 3 | | | 15.8 | — | — | 複合口縁部になで肩の体部がつづく。 | 明赤褐色 | 砂粒多い。 | 良好 | 胴部下半外面スス付着。 |
| 4 | | | 14.3 | — | — | 複合口縁部に倒卵形の体部がつづく。肩部に貝殻による刺突文がめぐる。 | 淡赤褐色 | 2mmの砂粒少量含む。 | 良好 | 胴部下半外面スス付着。 |
| 5 | | | 14.7 | — | — | 端部を外方にわずかに折り曲げる口縁部。 | 明淡褐色 | 0.5mm以下の砂粒多い。 | 普通 | 全体に薄手 |
| 6 | | | 13.5 | | — | 端部を丸くおさめる口縁部。 | 乳赤黄色 | 1～1.5mmの砂粒を含む。 | やや不良 | |
| 7 | | | — | 4.2 | — | 甕底部。かすかに平底をととめる。内面に指頭圧痕。 | 外面/暗黄褐色<br>内面/乳褐色 | 1mm前後の砂粒多い。 | 普通 | 外面スス付着。 |
| 8 | | | 31.1 | — | — | 大形の甕。端部に平坦面を作る複合口縁。体部内面はヘラケズリののち、一部ヘラミガキ。 | 外面/暗黄褐色<br>内面/淡黄褐色から暗橙色 | 1mm前後の砂粒多い。 | 良好 | |
| 9 | | 小形丸底壺 | 10.6 | — | 11.5 | 短く内湾する口縁部。球形の体部は外面下半をヘラケズリする。 | 淡明赤褐色 | 1mmの砂粒少量含むが、胎土精選される。 | 良好 | |
| 10 | | 低脚杯 | — | 5.1 | — | 低い脚部。杯部内面ヘラミガキ。 | 淡赤黄色 | 1mm前後の砂粒多い。 | 普通 | |
| 11 | | 鼓形器台 | — | 17.5 | — | 筒部内面が稜線状になった器台。 | 乳黄色<br>内面/黒色～淡赤黄色 | 1mm以下の砂粒多い。金雲母含む。 | 普通 | |
| 12 | | 壺か | — | — | — | 1条のタガがめぐる。内外面ナデており、口縁部か。 | 外面/肌色<br>内面/灰味肌色 | 1mm未満の長石を含むが、大形品にしては密。 | 良好 | |
| 13 | | 敲石 | | | | やや大形の敲石。表面の1面に敲打痕が残る。 | 淡灰緑色 | — | — | 2,440g |
| 14 | | 骨加工品 | | | | 刃物痕をととめる板状に加工された鯨骨。 | 黄灰白色 | — | — | |
| 15 | 茶褐色砂 | 甕 | 14.1 | — | — | 端部を丸くおさめる口縁部。頚部内面ヘラミガキ。 | 淡灰褐色 | 1～2mmの砂粒多い。 | 不良 | |
| 16 | | | 14.8 | — | — | 端部を丸くおさめる口縁部。頚部内面ヘラミガキ。肩部櫛描き沈線。 | 淡赤黄色 | 1mm以下の砂粒多い。 | 普通 | |
| 17 | | | 15.1 | — | — | 端部を薄く引き出す口縁部。頚部内面ヘラミガキ。肩部の櫛描き沈線は貝殻によるか。 | 淡黄褐色 | 1～1.5mmの砂粒を含む。金雲母含む。 | 普通 | |
| 18 | | | 17.5 | — | — | 端部を丸くおさめる口縁部。頚部内面ヘラミガキ。 | 淡灰褐色 | 1mm以下の砂粒含む。金雲母含む。 | 良好 | |
| 19 | | | 19.8 | — | — | 端部を薄く引き出し、丸くおさめる口縁部。頚部内面ヘラミガキ。 | 黄褐色 | 微砂粒多い。 | 普通 | |
| 20 | | | 19.9 | — | — | 端部を薄く引き出す口縁部。肩部に波状文がある。 | 乳橙色 | 0.5mm以下の砂粒多い。 | やや良好 | ケズリの方向から製作者は左利き。 |
| 21 | | | 15.6 | — | — | 端部を薄く引き出し、丸くおさめる口縁部。強いヨコナデ痕をととめる。頚部内面ヘラミガキ。肩部に波状文。 | 乳暗褐色 | 1mm以下の砂粒多い。 | 普通 | 外面一部スス付着。 |
| 22 | | | 17.5 | — | — | 端部を丸くおさめる口縁部。 | 淡黄褐色 | 1mm以下の砂粒多い。 | 普通 | |
| 23 | | | 16.6 | — | — | 端部を外方に曲げ、丸くおさめる口縁部。頚部内面ヘラミガキ。 | 外面/明黄褐色<br>内面/灰褐色 | 0.5～1mmの砂粒多い。 | 普通 | |

# 管路187　24m区出土遺物観察表（2）

| 番号 | 出土地点 | 器種 | 法量（cm） | | | 形態・手法の特徴 | 色調 | 胎土 | 焼成 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | | 口径 | 底径 | 器高 | | | | | |
| 24 | 茶褐色砂 | 甕 | 15.9 | － | － | 端部を丸くおさめる口縁部。体部内面ケズリののち少しミガキ。 | 淡黄褐色 | 1mm程度の砂粒多い。 | 普通 | |
| 25 | | | 18.1 | － | － | 端部を薄く引き出し、丸くおさめる口縁部。頚部櫛描き沈線。 | 乳赤黄色 | 1mm程度の砂粒を含む。 | やや良好 | |
| 26 | | | 16.6 | － | － | 端部にかすかな平坦面を作り、薄く引き出す口縁部。 | 淡黄褐色 | 1～1.5mmの砂粒を含む。金雲母含む。 | やや良好 | |
| 27 | | | 17.9 | － | － | 端部を薄く引き出し、丸くおさめる口縁部。頚部内面ヘラミガキ。肩部に沈線と貝殻腹縁による刺突文。 | 外面/淡赤褐色～灰褐色<br>内面/灰褐色 | 1mm以下の砂粒多い。 | 良好 | 一部スス付着 |
| 28 | | | 19.2 | － | － | 薄く引き出し、端部を平坦にする口縁部。頚部内面ヘラミガキ。肩部に沈線と条痕をもたない貝殻腹縁による刺突文。 | 淡赤黄色 | 1mm程度の砂粒を含む。 | 普通 | |
| 29 | | | 23.9 | － | － | 薄く、高く引き出し、端部を丸くおさめる口縁部。頚部内面ヘラミガキ。肩部に1条の沈線と条痕をもつ貝殻腹縁による刺突文を3段に施す。体部内面ヘラケズリののち、ナデ。 | 淡赤黄色 | 1mm程度の砂粒を多く含む。3～4mmのものもみられる。 | 普通 | |
| 30 | | 壷 | 16.7 | － | － | 直立に高く引き出し、端部をわずかに外方に折り曲げ、平坦におさめる口縁部。頚部内面シボリメ。肩部に波状文と平行線文を施す。原体は貝殻腹縁によるものか。ハケメは繊細なもの。 | 外面/淡茶褐色<br>内面/淡灰褐色 | 2mm以下の砂粒を多く含む。 | 良好 | |
| 31 | | 底部 | － | 5.2 | － | わずかに上げ底となる平底。外面丁寧なナデか。光沢を有する。 | 外面/黄灰褐色<br>内面/肌色 | 1mm以下の砂粒含む。 | 普通 | 破片内面上部は剥落する。煮炊によるか。 |
| 32 | | 脚部 | － | － | 14.7 | 径がやや小さく、鼓形器台とは異なる。内面ケズリののち、一部ミガキ。 | 淡赤黄色 | 1mm程度の砂粒含む。金雲母含む。 | 普通 | |
| 33 | | 高杯 | 25.7 | － | － | 屈曲して大きく開く高杯杯部。内外面丁寧なヘラミガキ。 | 淡乳褐色 | 1～2mmの砂粒を含む。金雲母がみられる。 | やや不良 | |
| 34 | 淡茶褐色砂 | 甕 | 15.4 | － | － | 直立に高く引き出し、端部を丸くおさめる口縁部。頚部内面ヘラミガキ。肩部に波状文と平行線文を施す。原体は貝殻腹縁によるものか。 | 外面/赤褐色<br>内面/黄褐色 | 1mm程度の砂粒を多く含む。2～3mmのものもみられる。 | やや良好 | 外面下半スス付着 |
| 35 | | 鼓形器台 | － | － | － | 比較的長い筒部をもつと考えられる器台下台部。下台部外面はヘラ描きの平行線文。内面はヘラケズリののちヘラミガキ。 | 淡赤黄色 | 1mm程度の砂粒多い。 | 良好 | |
| 36 | 調査前出土 | 甕 | 29.9 | － | － | 内傾する口縁外面に貝殻腹縁による平行線を描く。頚部内面ヘラケズリ、体部内面ケズリののちナデ、部分的なヘラミガキ。 | 淡黄褐色 | 2～3mmの砂粒多い。 | 普通 | |
| 37 | | | 35.6 | － | － | 口縁外面に貝殻腹縁による2単位の平行線を描く。 | 淡黄褐色 | 2～3mmの砂粒かなり多い。 | 不良 | |
| 38 | | | 19.9 | － | － | 口縁外面に貝殻腹縁による平行線を描く。頚部内面ヘラミガキ。 | 外面/灰黄色<br>内面/淡赤褐色 | 1～1.5mmの砂粒多い。 | やや不良 | |
| 39 | | | 19.6 | － | － | 厚く仕上げられた複合口縁部。 | 淡橙色～黒褐色 | 1mm程度の砂粒を多く含む。3mm程度のものもみられる。 | 普通 | 外面一部スス付着 |

## 管路187　24m区出土遺物観察表（3）

| 番号 | 出土地点 | 器種 | 法量（cm） | | | 形態・手法の特徴 | 色調 | 胎土 | 焼成 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | | 口径 | 底径 | 器高 | | | | | |
| 40 | 調査前出土 | 甕 | 15.5 | — | — | 複合口縁屈曲部に稜をもたないもの。口縁部は厚く、端部を丸くおさめる。頸部内面をヘラミガキする。 | 淡橙色～黒褐色 | 1mm程度の砂粒を含む。2～3mmの円磨した小豆色の砂粒を含む。 | 普通 | 含まれる円磨した小豆色の砂粒は、在地のものと異なる。 |
| 41 | | | 23.8 | — | — | 薄く、高く引き出し、端部を丸くおさめる口縁部。 | 淡橙色 | 1mm前後の砂粒多い。 | 普通 | |
| 42 | | | 14.6 | — | — | 薄く、高く引き出し、端部を丸くおさめる口縁部。肩部に波状文がある。 | 灰褐色 | 1mm程度の砂粒を含む。 | 普通 | |
| 43 | | | 19.7 | — | — | 薄く引き出し、端部をわずかに外方に曲げる口縁部。 | 淡橙色～淡灰褐色 | 0.5mm以下の砂粒多い。 | 普通 | |
| 44 | | | 15.1 | — | — | 薄く引き出した口縁部になで肩の体部が続く。 | 黄褐色 | 3～4mm程度の砂粒を含むが、1mm前後のものが多い。 | 普通 | |
| 45 | | | 17.1 | — | — | 均一に引き出した口縁は、端部をわずかに折り曲げ、平坦面をつくる。複合口縁部は鈍く突出する。 | 黄褐色 | 1mm以下の砂粒多い。 | 良好 | |
| 46 | | | 19.8 | — | — | 均一に引き出した口縁は、端部で平坦面をつくる。複合口縁部は鋭く水平に突出する。 | 淡黄褐色 | 1mm以下の砂粒を含む。金雲母少量含む。 | 良好 | |
| 47 | | 鼓形器台 | — | — | — | 筒部が縮約したもの。上台内面はミガキ。下台内面はヘラケズリ。 | 淡橙色 | 比較的密 | 良好 | |
| 48 | | | — | — | — | 筒部が縮約したもの。上台内面はミガキ。下台内面はヘラケズリ。 | 灰橙色 | 1mm以下の石英・長石含む。金雲母もみえる。 | 普通 | |
| 49 | | 高杯 | 23.8 | — | — | 比較的浅い皿形の杯部。内外面ヘラミガキで仕上げる。 | 淡赤黄色 | 1mm程度の砂粒がやや多い。金雲母を含む。 | やや不良 | |
| 50 | | 須恵器蓋 | 11.9 | — | — | 宝珠形のつまみが付くと考えられる蓋。天井部回転ヘラケズリ。 | 青灰色 | 0.5mm程度の砂粒を少量含む。 | 普通 | |
| 51 | | 敲石 | | | | 円礫を転用した敲石。半折する。 | | | | 600g |
| 52 | | 砥石 | | | | 円礫を転用した砥石。層理にそった平坦な1面を砥面とする。 | | | | 200g |

## 管路122出土遺物観察表（1）

| 番号 | 出土地点 | 器種 | 法量（cm） | | | 形態・手法の特徴 | 色調 | 胎土 | 焼成 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | | 口径 | 底径 | 器高 | | | | | |
| 53 | 管路122 | 壺 | 22.4 | — | — | 口縁端部に凹線をもつ大きく開く壺。 | 黄灰白色 | 微砂粒含むが密。 | 良好 | |
| 54 | | 甕 | — | — | — | 口縁端部に粘土紐を貼り付ける。内面縦方向のハケメ。 | 外/肌色<br>内/淡茶褐色 | 径1mm以下の砂粒多い。 | やや不良 | 朝鮮系無文土器の影響を受けたものか。 |
| 55 | | | — | 5.0 | — | わずかに上げ底となる底部。外面ヘラミガキ、内面ヘラケズリ。 | 外/淡褐色<br>内/灰白色 | 径2mm程度の石英・長石多い。 | 普通 | |
| 56 | | 高杯 | — | — | — | 筒状の高杯脚部。外面貝殻腹縁による羽状文、4本のヘラ描き沈線。 | 淡黄褐色 | 径1mm程度の石英・長石含む。 | 良好 | 外面赤彩 |
| 57 | | 壺 | — | — | — | クシ状工具による沈線と波状文を描く壺肩部。 | 灰白色 | 径1mm以下の石英粒含む。 | 普通 | 近畿系二重口縁壺か。 |

## 管路122出土遺物観察表（２）

| 番号 | 出土地点 | 器種 | 法量(cm) 口径 | 底径 | 器高 | 形態・手法の特徴 | 色調 | 胎土 | 焼成 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 58 | 管路122 | 甕 | 16.6 | － | － | 全体に厚手の二重口縁。 | 外/黄褐色<br>内/灰褐色 | 径１mm程度の石英含むが密。 | 良好 | |
| 59 | | | 16.6 | － | － | 口縁端部を内側に肥厚させる単純口縁甕。 | 淡橙色 | 長石粒含むが密。 | 良好 | |
| 60 | | | 15.0 | － | － | 口縁端部をわずかに内側に肥厚させる単純口縁甕。 | 外/淡灰褐色<br>内/淡橙色 | 石英・長石の細砂粒含むが密。 | 良好 | |
| 61 | | | 17.0 | － | － | わずかに口縁部を内湾させる単純口縁甕。 | 暗黄褐色 | 石英・長石の細砂粒含む。 | 良好 | |
| 62 | | | 17.4 | － | － | 厚手の単純口縁甕。口縁端部は工具で切る。 | 淡灰褐色 | 長石の大粒の砂粒含む。 | 普通 | |
| 63 | | 高杯 | － | － | － | 杯部と脚部の接合部。杯部内外面ミガキ。 | 肌色 | 径１mm程度の石英目立つ。 | 普通 | |
| 64 | | | － | － | － | 杯部外面に稜線をもつ。杯部内面ヘラミガキによる暗文。 | 外/赤褐色<br>内/暗黄褐色 | 長石細砂粒含むが密。 | 良好 | |
| 65 | | | － | － | － | 脚筒部。脚内面上半は刳りぬく。外面縦方向のミガキののち、横方向のミガキで暗文を施す。 | 肌色 | 精選され密。 | 良好 | 外面赤彩 |
| 66 | | | － | － | － | 脚筒部。脚内面シボリメが見られる。 | 外/黄灰褐色<br>内/肌色 | 微砂粒含む。 | 普通 | |
| 67 | | | 17.6 | － | － | 椀状の杯部。内外面ヘラミガキにより、暗文状に仕上げる。 | 茶褐色 | ２～３mm程度の砂粒を含むが、比較的密。 | 良好 | 外面赤彩 |
| 68 | | 須恵器長頸壺 | － | － | － | 頸部接合部。内面に接合痕をとどめる。 | 外/暗灰色<br>内/灰色 | 密 | 普通 | |

## 昭和60年度試掘調査出土遺物観察表（１）

| 番号 | 出土地点 | 器種 | 法量(cm) 口径 | 底径 | 器高 | 形態・手法の特徴 | 色調 | 胎土 | 焼成 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 69 | G１ | 須恵器高杯 | － | 9.7 | － | 脚端部に面を作る。方形の透しがある。 | 灰色 | 白色砂粒を含む。 | 普通 | 外面風化する。長期間地表にあったか。 |
| 70 | G２ | 須恵器杯 | 11.2 | － | － | 低い立ち上り部。底部回転ヘラケズリ。 | 淡灰褐色 | 径１mm以下の長石含む。 | 普通 | 口唇付近風化 |
| 71 | | | 11.8 | － | － | 低い立ち上り部。 | 灰色 | 微砂粒含むが密。 | 普通 | |
| 72 | G３クロスナ上面 | | 11.0 | － | － | やや小ぶりな椀形の杯部。 | 淡灰褐色 | 微砂粒多い。 | やや不良 | |
| 73 | | | 13.2 | － | － | 椀形の杯部。 | 暗灰色 | 比較的密。 | 良好 | |
| 74 | | | － | 7.2 | － | 椀形の杯底部。糸切り痕をとどめる。 | 暗灰色 | 長石目立つ。 | 普通 | |
| 75 | G３クロスナ内 | 土師器杯 | 14.0 | － | － | 皿状の杯。内面ヘラミガキによる暗文をもつか。 | 淡橙色 | 精選されるが粉っぽい。 | 良好 | 内外面赤彩 |
| 76 | | 土師器甕 | 18.0 | － | － | 円筒形の体部から短く屈曲する口縁部。体部外面縦方向のハケメ。内面ヘラケズリ。 | 外/灰褐色<br>内/黄褐色 | 径１mm程度の石英・長石多い。 | 良好 | |
| 77 | | | 17.2 | － | － | 球形の体部から直線的に折れ曲がる単純口縁。体部外面粗いタテハケ。内面ヘラケズリ。 | 外/茶褐色<br>内/橙色 | 径１mm程度の長石目立つ。 | 普通 | |
| 78 | | | 26.4 | － | － | 体部から外反して折れ曲がる単純口縁。体部外面粗いタテハケ。内面ヘラケズリ。 | 外/暗褐色<br>内/黄灰色 | 径0.5mm程度の砂粒多い。 | 普通 | |
| 79 | | | 27.2 | － | － | 体部から直線的に折れ曲がる単純口縁。体部内面ヘラケズリ。 | 淡橙色 | 径0.5mm程度の砂粒多い。 | 普通 | |
| 80 | | 須恵器蓋 | 9.2 | 12.0 | 2.6 | 輪状つまみをもつ蓋。杯にかみ合う立ち上がり短い。 | 紫灰色 | 長石粒見えるが密。 | 普通 | |

昭和60年度試掘調査出土遺物観察表（２）

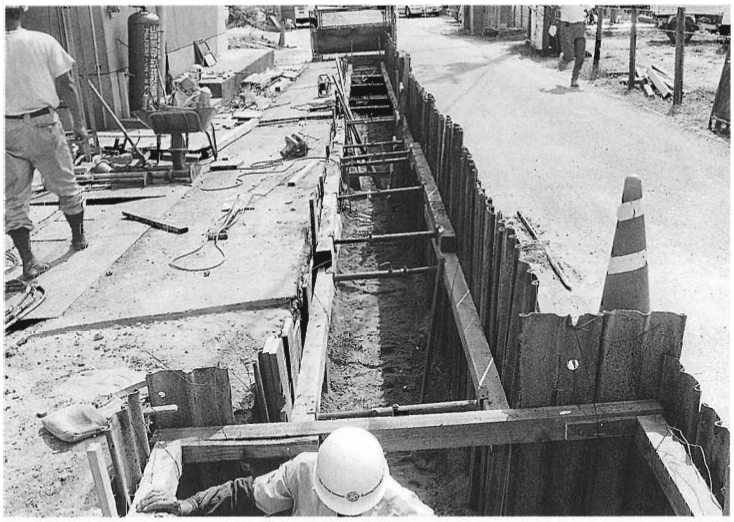
| 番号 | 出土地点 | 器　種 | 法　量（cm） | | | 形態・手法の特徴 | 色　調 | 胎　土 | 焼　成 | 備　考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | | 口径 | 底径 | 器高 | | | | | |
| 81 | G３クロスナ内 | 須恵器杯 | － | 7.0 | － | 底部に糸切り痕を残す杯。 | 淡灰色 | 長石粒見えるが比較的密。 | やや不良 | |
| 82 | | | － | － | － | 貼付け高台の接合痕をとどめる皿底部。 | 淡灰色 | 細砂粒含む。 | 不良 | |
| 83 | G４ | 土師器カマド | － | － | － | 外面タテハケ、内面ヘラケズリの移動式カマド片。 | 淡橙色 | 径１mm程度の石英・長石含む。 | 良好 | |
| 84 | | 須恵器瓶 | － | － | － | 頚部接合部。内面に接合痕をとどめる。 | 暗灰色 | 径１mm以下の石英・長石含む。 | 良好 | |
| 85 | | 須恵器杯 | 22.0 | 16.9 | 3.6 | 外方にふんばる高台をもつ皿。 | 灰白色 | 径１mm以下の石英・長石含む。 | 不良 | |

古浦海岸遠景（1987年）

管路196（西から）

図版 2

管路181（東から）



管路191（北から）

管路150（北から）

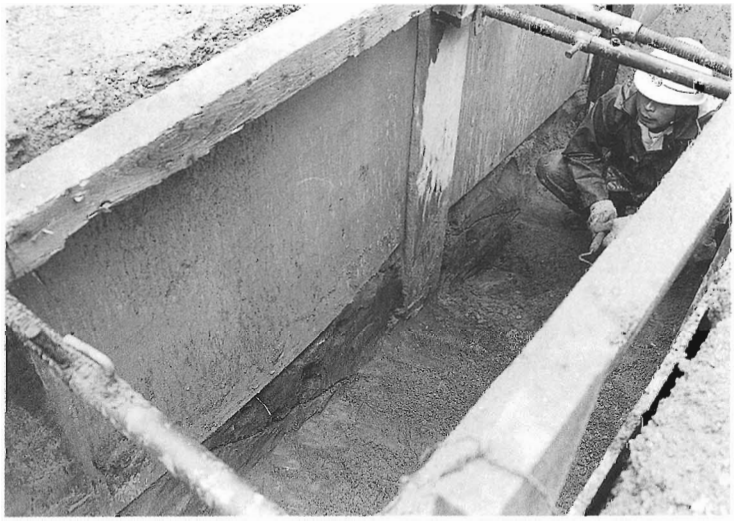
管路148（南から）

管路137（南から）

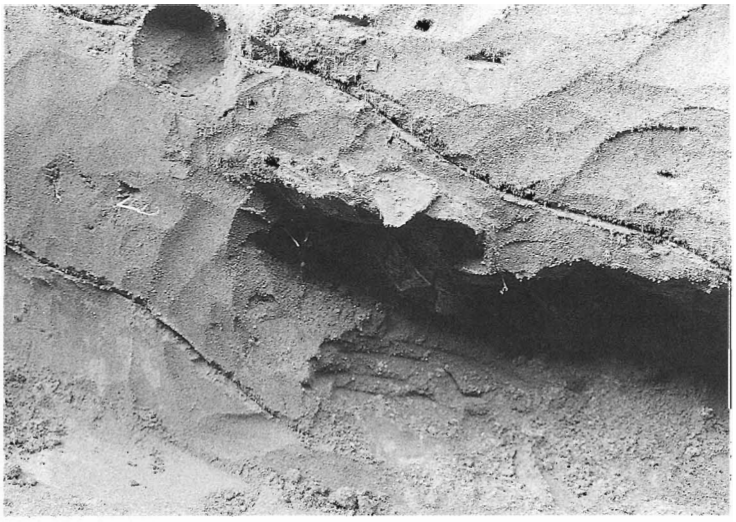
同上
茶褐色砂層

図版 4

管路187（東から）



同上
24m 区検出状況



同上
黒褐色砂遺物出土状況

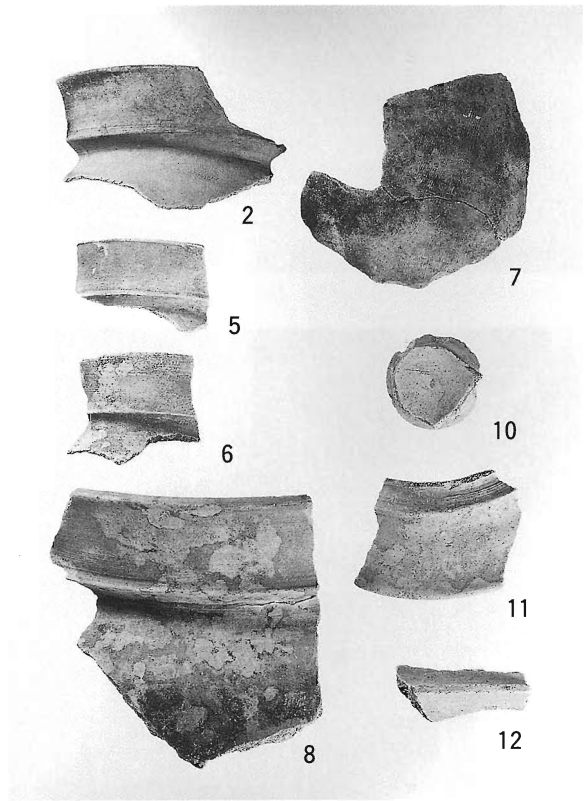
24m 区淡茶褐色砂
遺物検出状況

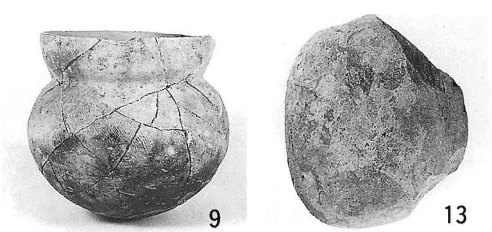
24m 区茶褐色砂
遺物検出状況

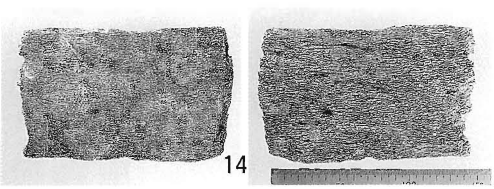
管路186（北から）

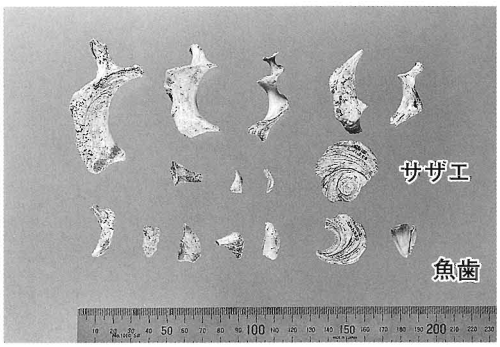
図版 6

管路187　24m 区出土遺物

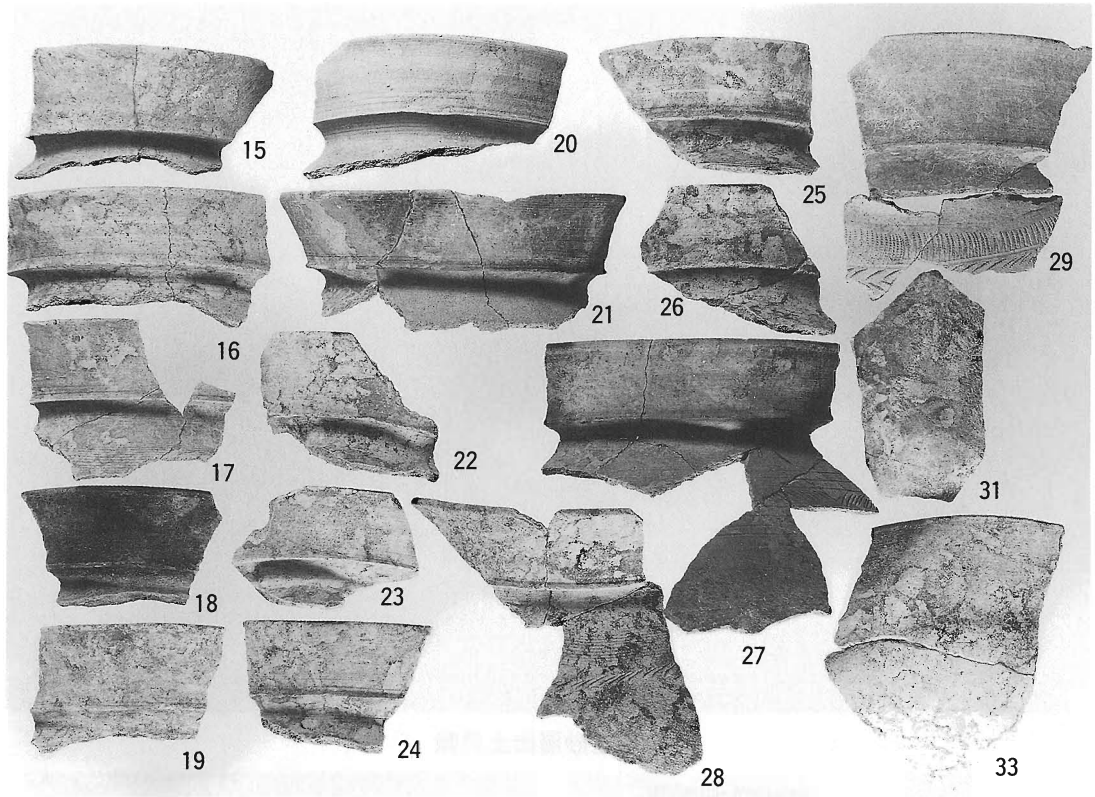


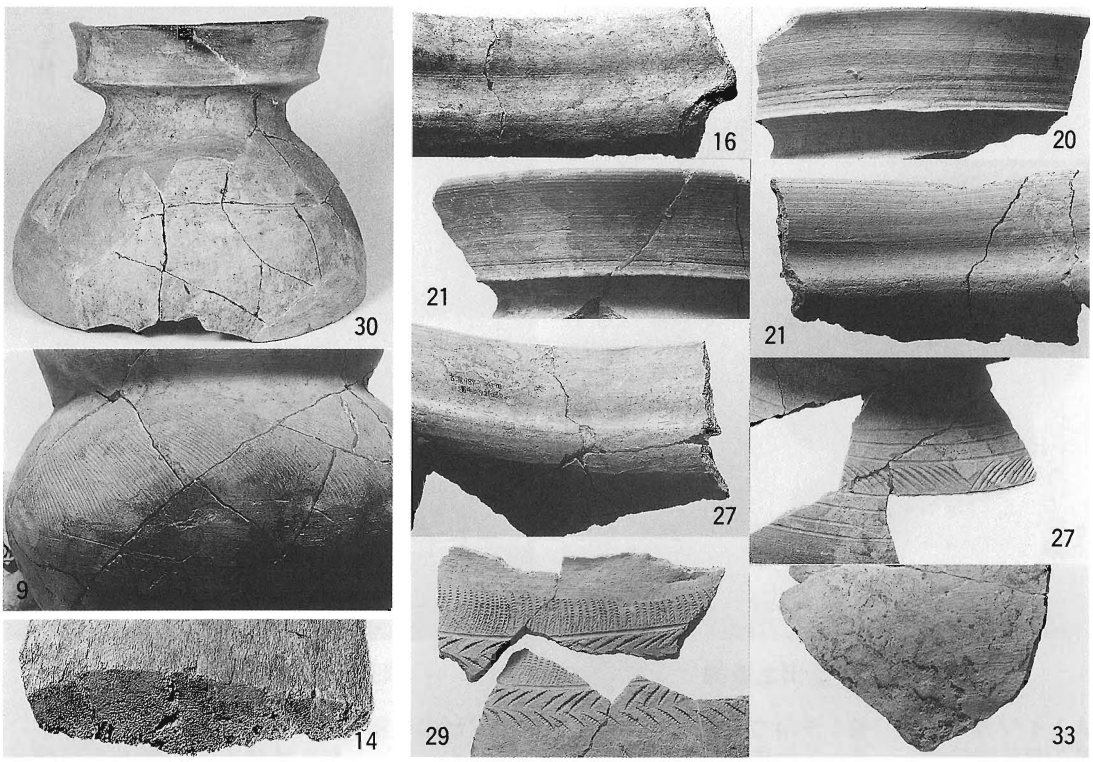




黒褐色砂層出土遺物

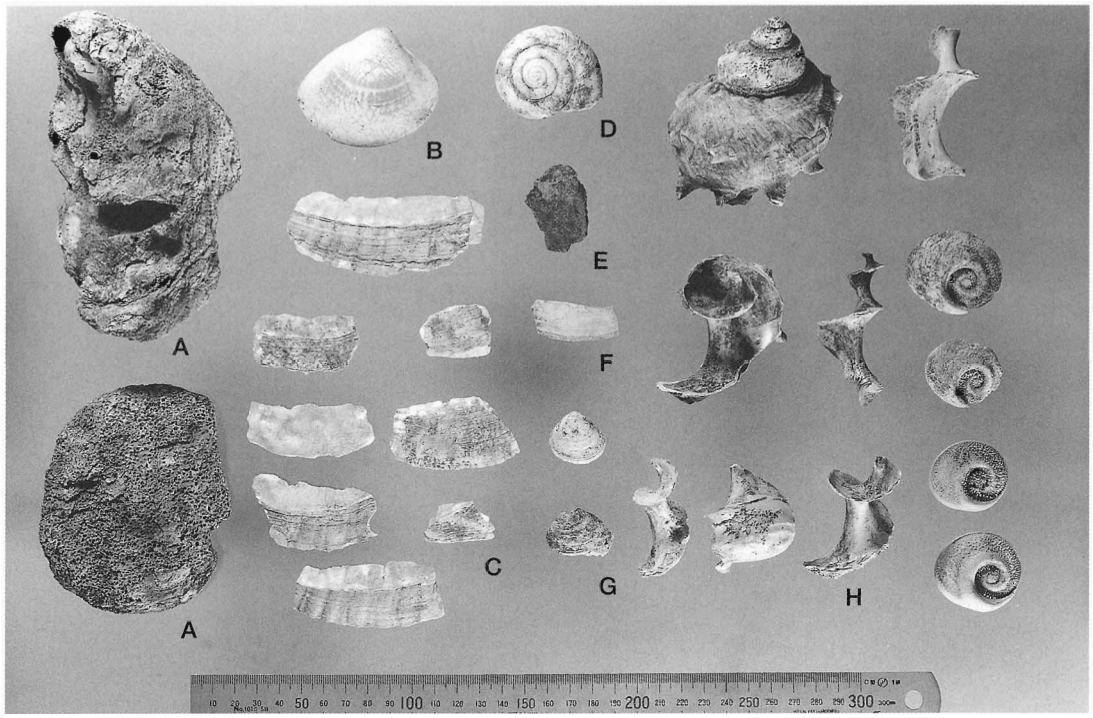



茶褐色砂層出土遺物

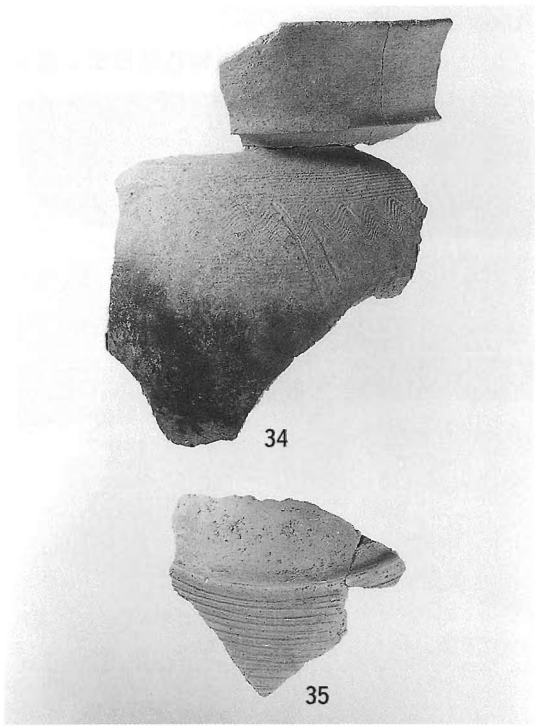



各層出土遺物の細部

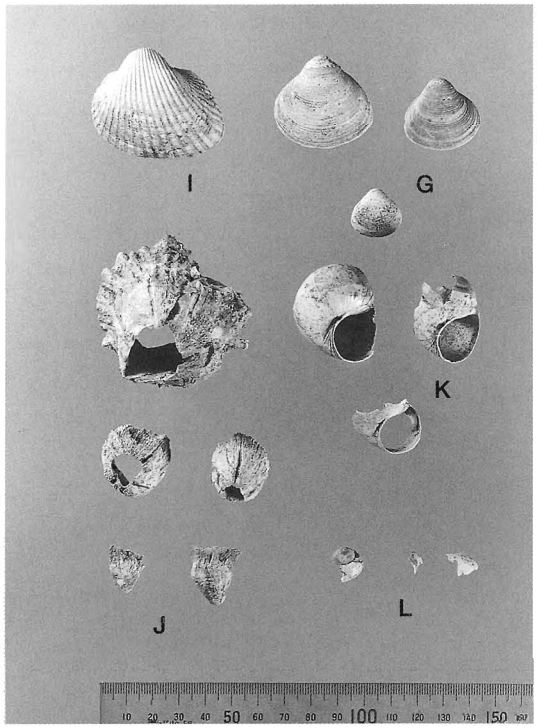
図版 8




茶褐色砂層出土貝類

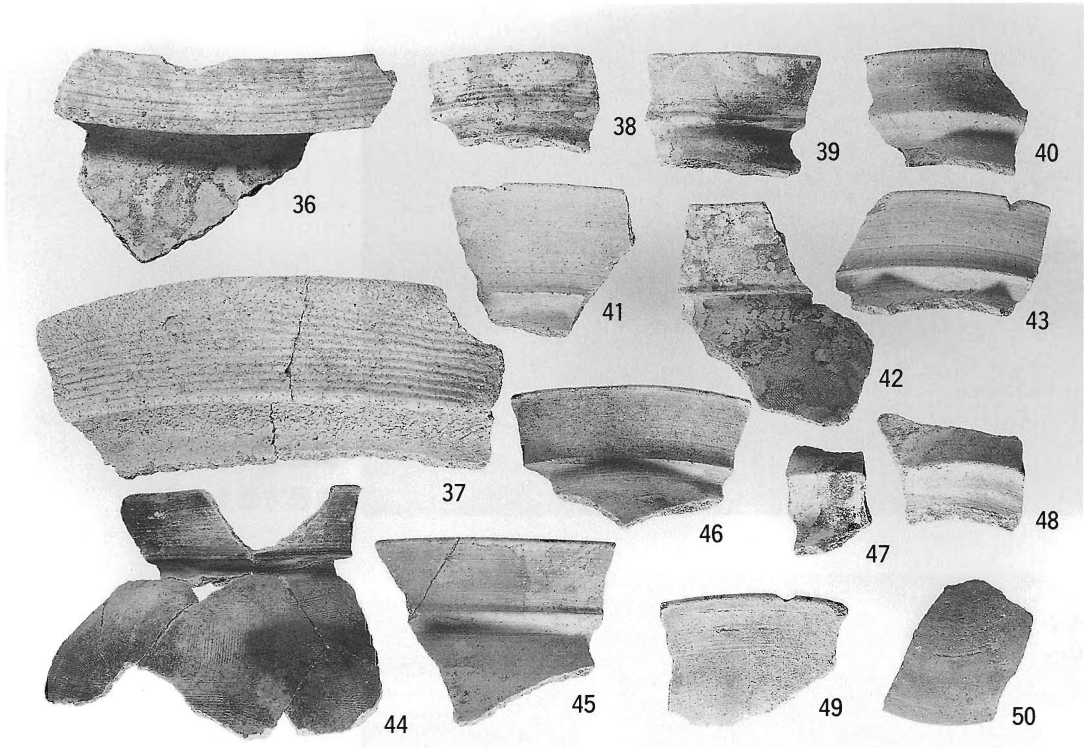



淡茶褐色砂層出土遺物

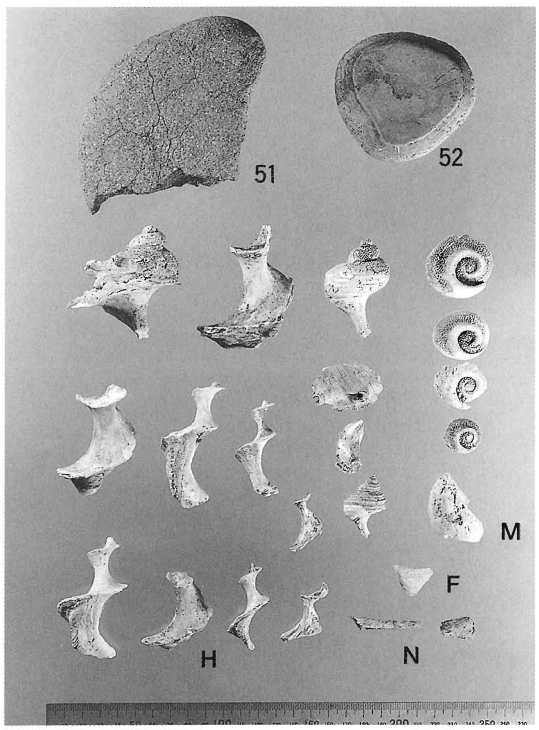



淡茶褐色砂層出土貝類

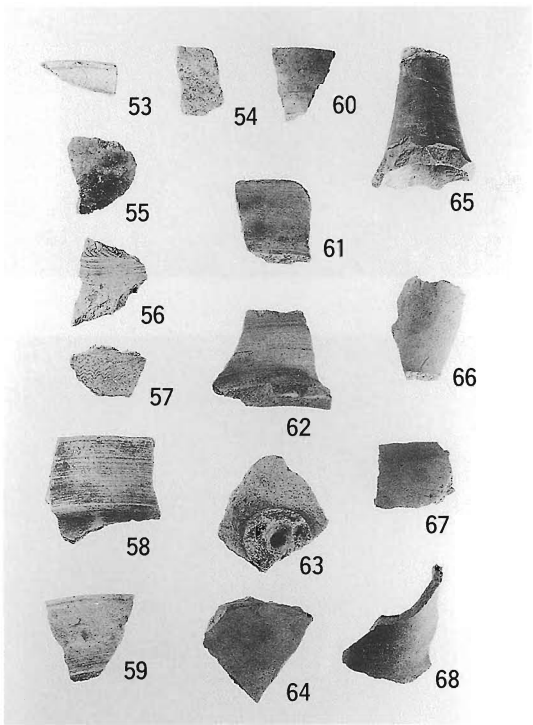
A：イワガキ　B：チョウセンハマグリ　C：アワビの一種　D：イズモマイマイ
E：哺乳類の骨　F：二枚貝破片　G：ヤマトシジミ　H：サザエ　I：サルボウガイ
J：アカフジツボ　K：オオタニシ　L：オオタニシの幼貝




調査前出土遺物



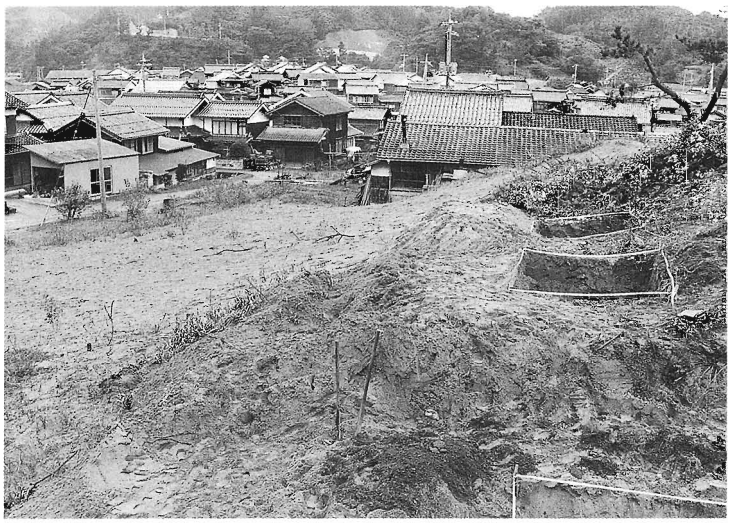

調査前出土石器・貝類




管路122出土遺物

H：サザエ　M：イガイ　F：二枚貝破片
N：魚類の骨

昭和60年度試掘調査

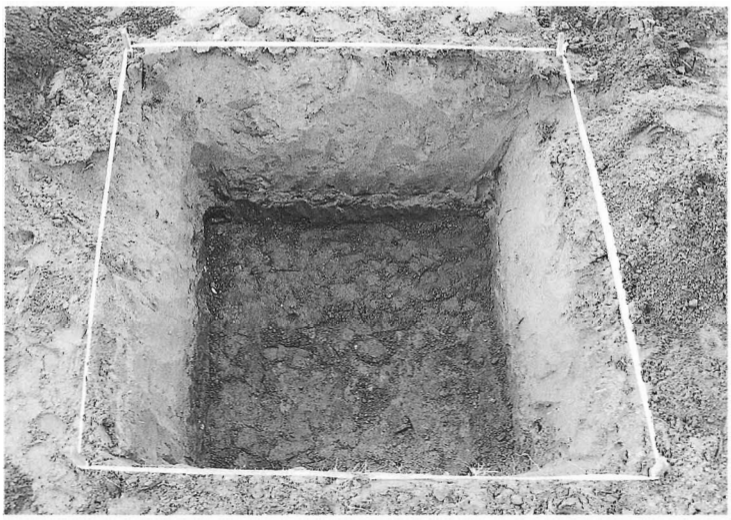


調査地から
恵曇方面をのぞむ

調査地（北から）

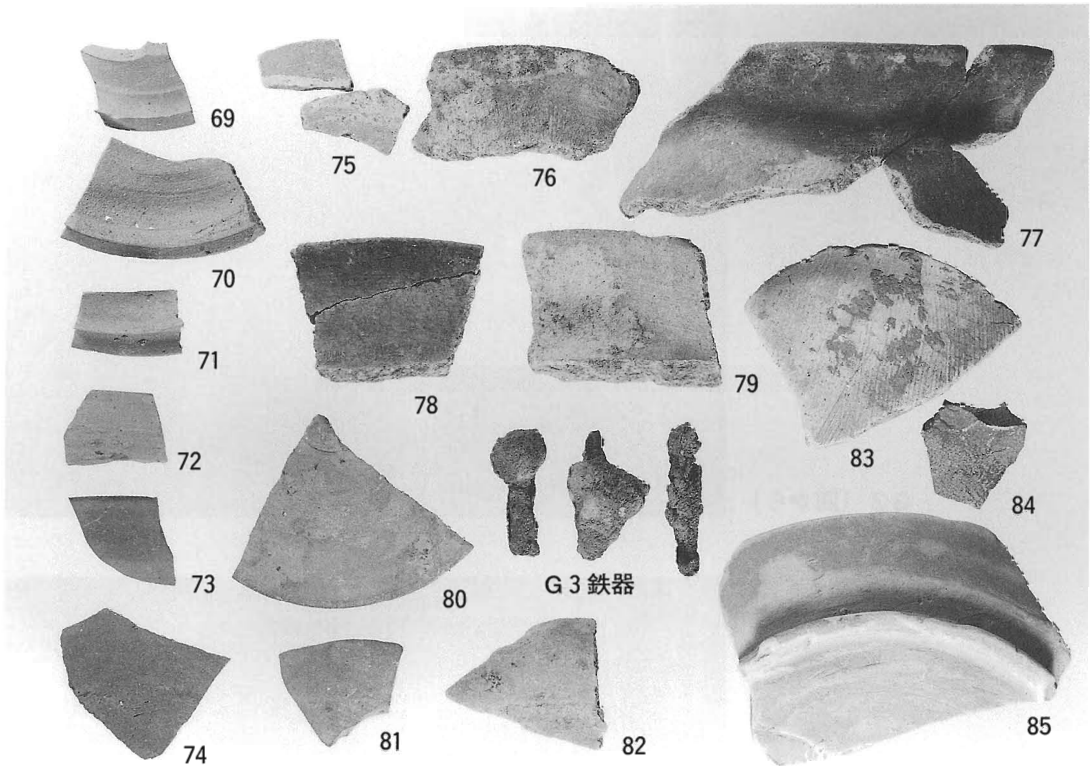
G１（南から）

G２（西から）

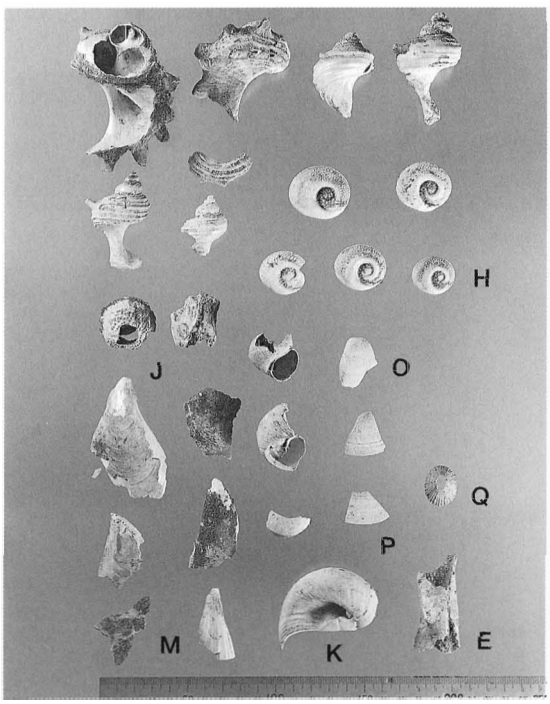


G３（南から）

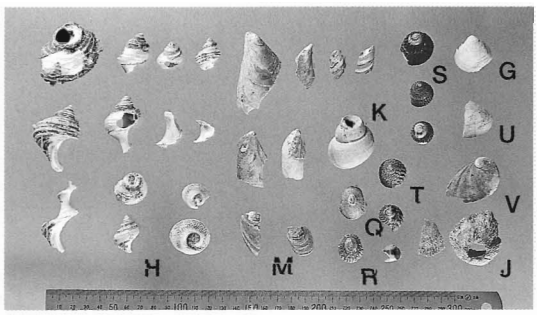
G４（南から）



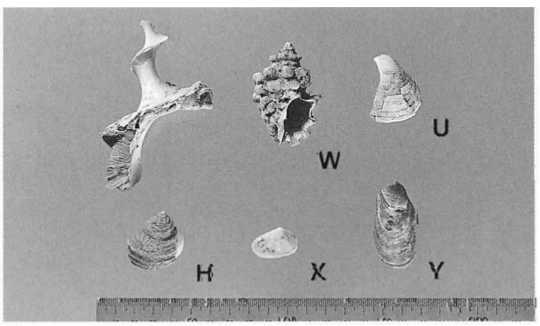

69：G 1　70～71：G 2　72～74：G 3 クロスナ上面
75～82：G 3 クロスナ内　83～85：G 4




G 3 クロスナ層内出土貝類




G 3 クロスナ上面出土貝類




G 4 出土貝類

E：哺乳類の骨　G：ヤマトシジミ　H：サザエ　J：アカフジツボ　K：オオタニシ　M：イガイ
O：ツメタガイ　P：サラガイ?　Q：コウダカアオイガイ　R：カモガイ　S：クボガイ　T：コシダカガンガラ　U：マツヤワスレガイ　V：トコブシ　W：レイシガイ　X：ナミノコガイ　Y：ムラサキインコガイ

下水管埋設事業に伴う

# 古浦砂丘遺跡立会調査報告書

1993年３月　発行

発行　鹿島町教育委員会

島根県八束郡鹿島町大字佐陀本郷640－１

印刷　株式会社　報光社